

第拾五號

文明之母第十五號目次

本誌は毎月二回(三日十八日)に發行す
本誌は前金に非れば發送せず
本誌の定價は一冊金六錢十二冊半年分金六十八錢廿四冊壹年分金一圓卅錢
全國無逓送料
本誌の廣告料は(六號活字廿四字詰)

	壹回	二回以上
壹行	金八錢	金七錢
三十行(半頁)以上	金七錢	金六錢
六十行(壹頁)以上	金六錢	金五錢

本誌の見本は郵券六錢を送らるれば呈す
本誌の代金御田送の節は内國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度
郵券代用は一割増
本誌の前金將に相切れんとする時は其巻の宿所姓名を朱書して發送すべし

版權所有

主筆　大矢森之助
發行兼編輯人　中村一　東京深川區猪町十三番地
印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地　生文社

楠正行の母



文明之母第十五號

明治二十二年十二月三日發兌



左の一篇は本社の大矢森之助の稿せしものにして、嘗て其の朋友某氏に送りたるものなるが、掲げて以て本號の社説に代ふ。

○裸體畫美人を弔ふ文

鐵筆將軍　大矢森之助

明治二十二年十一月十五日、内務省告示第三十九號を以て、幾多の裸體畫美人は風俗を壞亂するものと認められ、他の數多の同類と與に其の發賣を禁止せられたり。乃ち左のごとし。

一 歐州石版摸書婦人小兒を愛を	一枚	東京々橋區銀坐一丁目廿一番地矢島智三郎發行
一 婦人寢像	一枚	神田區今川小路二丁目十三番地矢田龍彦發行
一 あま	一枚	京橋區三十間堀三丁目八番地塚本岩三郎發行
一 美人湯上り蝶追之圖	一枚	神田區西今川町三番地　山本新吉發行

一其姿浴後のおもかげ　一枚　京橋區銀坐三丁目三番地　辻本治三郎發行
一浴後納凉　一枚　京橋區加賀町五番地　林信廣發行
一温泉浴後之圖　一枚　仝　仝
一名妓湯上りの圖　一枚　日本橋區新和泉町一番地　福岡宗長發行
一浴後の凉　一枚　日本橋區馬喰町三丁目四番地　渡邊忠久發行
一睡後納凉の圖　一枚　京都下京區室町通綾小路下ル白樂天町三十三番戸　小谷義一發行
一婦女浴水圖　一枚　大阪西成郡北野村三百七十五番屋敷　辻井彌三郎發行
一三美水浴之圖　一枚　仝　仝
一浴場美人之圖　一枚　仝　仝

吾人は嘗て論じて曰く、(上略)西洋に於いては成程古来裸体の圖画を作るものあり乃ち裸体の圖画は繪画中の一体の爲せるものなり。然るに我が國に於いては春画、若くは相撲繪の外、之を作るものあらざるなり。其れ然り、然るが故に西洋に於いては、裸体画は常のものなり、西洋人の目に於いては裸体畫は異しく觀えざるなり。然れども日本に於いては裸体畫は常のものにあらざるなり、故に日本人の目に於いては裸体畫は異しく見らるゝなり。若し夫れ美人の豐々たる乳房淵々たる股肉、精細に描き緻密に寫さ

来らは嫩少年は之を見て果して如何なる感覺を起すべきか。と、吾人は今に當りて其の注意の中れるを知り、而して其の筋の英斷を喜ぶなり。

嗚呼裸体畫美人よ、卿等は嘗て裸体の醜を知らざりしか、裸体の野卑破廉恥なるを知らざりしか。卿等は實に幾多の嫩少年をして心魂濛々たらしめたりしぞ。或る貴公子の如きは、實に書冊を購ふべきの黄金を投じて、卿等を机邊に聘せしと聞けり。卿等は又幾多の年少婦女の心腸を腐敗せしめしぞ。或る華族の令孃の如きは、實に學校歸りの途に於いて、卿等が浴後の醜体を一瞥し、其の後沐浴する毎に之を思ひ出だし、浴後數時の間寒さを堪へて裸体になり居るを常とせしと聞けり。厭ふべき者隨分世の中には多し、癩病者も厭ふべし。病瘡者も厭ふべし、鼻酸流る爺も厭ふべし、目脂垂るゝ婆も厭ふべし。然れども未だ卿等が裸体ほど厭ふべき最も甚だしきはあらざるなり。憎むべき者も隨分世の中には多きなり、騙盜も憎むべし、盜賊も憎むべし、朋友の一挫折を見て又往從せざる薄情の鼬鼠も憎むべきなり、主人の眼を偷みて奇利を獲する番頭の白鼠も憎むべきなり。然れども醜を露はして黄金を得んと欲する裸体の卿等ほど憎むべき最も甚しきものあらざるなり。嗚呼卿等は實に厭ふべき最も甚たしきものなり、憎むべき最も甚しきものなり。故に今や卿等の死を聞くも、吾人は一點の涙なきなり——近隣の畜猫が死しても熱涙を頒つに吝ならざる吾人が、ほとんど絶艷絶麗ともいふべき

卿等の死を聞て、欣々然たるもの豈に偶然ならんや、豈に徒爾ならんや。吾人は實に卿等の死を喜ぶ。莞爾として之を吊するの文を草す。如何にも愉快!!

草し了るの夕、幾多の裸体美人あり余が机邊に坐し、涙を垂れて訴ふて曰く。嗚呼君の妾等罪せらる、酷なる哉。蓋し君は物に表裏本末あるを知らざるなり、妾等實に愚なりと雖も豈裸體の醜を知らざらんや、豈之を知りて好んで之を爲さんや。但し人情の弱點に附け込み、奇名を博し奇利を漁せんと欲する野卑なる文學者美術者あり決して好まざるの妾等を捕へて、無理にも無慘にも之を裸體とし、以て妾等が同胞に見えしめたるのみ。理想ある士女は成程妾等が醜体を看て背に汗せしならん、然れども妾等も多くの同胞に對して常に襟を沾ほせり。君が前の如くに論ずるは實に本を捨て、末に趨り裏を知らずして表をのみ喋々するものに非ずして何ぞ願くは妾等が此の言を論尾に記せられよ然らざれば妾等は實に地下に瞑するを得ざるなりと余問ふ所あらんとすれば、夢は覺めたり。捨て置くべきにあらざれば、聊か茲に附記す。



○男女の關係

島地默雷演說

私は今日、男女の關係といふ題を掲げて、暫く皆樣の御耳を汚します。誠に近來は世の中で、婦人方の教育を頻りに喧しく論ずる樣になりましたが、最も結構なる事と思ひます。私も女子教育のことに就いては、是迄度々演說も致し、又は筆を採りて書いた事もあります。即ち私の同志で發行する、令知會の雜誌にも、男女關係論といふ題を掲げて、會說に論じて置きました。又上毛婦人教育雜誌へも、同樣なる意味を書いて送りました。約まる處、教育と申すものは、相手の性質に應じて教へ育つべきものにて、其の性質に備りて居るものを、發達せしむる導きが、即ち教育と申すものであります。中庸に性に率ふ之を道と云ふ道を修むる之を教と云ふとある、此の簡單なる一語で、教育の趣意は、大抵其の方嚮が定まること、思ひます。

扨物には夫々性質が備りて居るもの故、夫を程好く引延ばし、正當なる順序に向ツて行く樣にするが、教育の本旨と申して宜い樣に思ひます。喩へて申せば、火の性は熱して物を乾かし、水の性は冷かにして物を潤すものですから、之を其の性質の通りに用ゐ、物を乾かすべき處へ火を用ゐ、物を潤すべき處へ水を用ゐさへすれば宜しきに、夫をあちこちにして、物を乾かすに水を用ゐ、物を潤すに火を用ひましたならば、甚しき間

違ひとなります。男女の關係も其の通りでありまして、體格の有樣が違ふて居る以上は、性質にも幾分かの不同があります。其の不同の性質に率ふて、適當の教へ方をなすが、真の教育といふものであります。若し左れなくて、性質に率ふか、背くか、一向に考へもせず、唯教育といふことが流行する故、何でも角でも教へるが宜しい、學校さへ立てればよい、學校にさへやればよい、と唯遣り放しにすることとなれば、夫れ全く教へと申すものではなくて、真の戯れ事といふものになります、教へは決してそんな流行事や、翫弄物ではありません。をしへといふ言葉の意味に於いても、をしは即ち惜み愛するの意、へは方にて即ち方法の事、行方などいふへと同じ。取りも直さず、愛しむ所以の方法を指して教へといふ、言葉も出來たるものでありますれば、世間にても大切なる品物なれば、之を愛みて徒に使用せず、大切の用事に使用して、其の品物の價直を失はず、其の用きを全ふせしむるが如く、教へは人々の心の用きと、身の行ひを誤らせぬ樣に、いと大切に愛みて徒に使ひ捨てぬ樣、さとし導くべきものなれば、極めて大切の事にて、能く〳〵性質に相應する樣致すが肝要と思ひます。即ち婦人方の性質に背いたことを教へては、教への旨意に背くことゝ存じます。

凡そ男は男の爲すべき務めあり、女は女の爲すべき務めありて、其の務めは違ひても、

其の工合が能くはまり、調子の揃ふ樣に仕立てるが教育の所詮にて、彼の琴瑟を皷せるが如く、と申して、琴は琴、瑟は瑟、みな各々自己の調子を揃へ、呂律に應ずる發音をさするが肝要でありまする。近來往々男女同權といふ辭に就いて、大變なる解し誤りをいたし、男と女と全く一樣にしなければならぬ樣に考へ居るものがありまするが、是れは殊の外の間違にて、左樣に男女が同樣にせねばならぬことならば、寧ろ始めより男子ばかりか、又は女子計りで置くがよろしい。併し世界の事は左樣に一方に片つけることは出來ぬもので、何でも角でも形を以て顯はれて來るときは、皆相對と申して兩樣に分れて出るものでありまする。男女は勿論、朝野の分れ、官民の分れ、治者被治者など、皆それぞれに相對して居るものでありまする。

現に男女の有樣に就いても、形が違ひ、姿がちがふのは、違ふ所以がありて違ふのでありまする。去て見れば、男には男相應、女には女相應の教育を施し、所謂程々にして行くことが出來るので、それで始めて權の字の意味も分りまする。權は即ち衡の分銅といふ字でありまする。彼の分銅といふものは、此方へ寄せることもあり、彼方へ寄せる事もあり、向ふの都合に依りて、程々ふ宜しき釣合を取るのでありまする。若し之を一所に極めて仕舞ひましたら、彼方へも此方へも、動かす事は出來ず、釣合を取ることも叶ひますまい。

男子が外を周旋すれば、女子は内を整頓するとか、良人が朝に野に奔走すれば、細君は女子のこと、厨庫のことを監督するとか、兎に角内事を司どり細密のことを受持つべき任あれば女子は何處までも柔和に且つ控へ目にして行くので、丁度能き釣合が取れることゝ思ひます。

前にも申掛けたる音樂の音聲にても、或は切斷音のものと、連續音のものとがあります。たとへば笛のごときものは、連續音で、何處までも其の音を長く鳴らすが宜しく、太皷の如きものは、切斷音で、一聲〳〵に聲が斷れて行かねばなりません。若し笛をピツ〳〵と吹き切り、太皷をド――ンと續けて打つことが出來ぬ事で、笛はピ――イピ――といふ音を發し、太皷はドン〳〵〳〵といふ聲を響かし、斷續、兩音が相違しながら相伴ふて却て調子が揃ひ、格別の面白味を覺えることであります。篳篥は篳篥、横笛は横笛、笙は笙、と各々持前の音樂を失はず、亂さず、譜もちがひ、音も違ひて、其の調子の合する所が微妙であります。西洋の樂でも、同樣の事で、樂器の大小、其の音の高下、程々に別れて、其の調子の合ふ所が面白ふあります。男女の間柄も同樣の譯で、各々能く其の釣合を取りて行かねばなりませぬ。此の目的を誤りさへしなければ、教育の事に於いては、思ひ半ばに過ぐる事かと思ひまする。

（未完）

花の舍主人

○音樂の及ぼす勢力

人類の音樂に身を托し、音樂に依賴する所あるは、實に掩ふべからざる事實なり。音樂の歐米各國に盛に行はる、は論を待たず、彼の亞非利加の黑人種の如きも甚だ之を好み、頗る巧に之を演じ、低音の如きは殊に此の人種の最長處なるを以て、歐州にて最低音を演ずるには常に黑人種に依賴すといふ、また以て其の術の巧なるを知るべし。又小兒の如き其の律の正しきこと、我等成人の常に感服する所なり。凡て人類は賢愚を問はず、喜悅の際、悲哀の際には、必ず皆歌ふ者なるが如し。語に曰く、子齊に往き歌を聞く、三日肉の味を知らず、とこれ信に然りしならん。

音樂を好むは獨り人類のみならず、禽獸の如きも其の感動を被ること實に尠なからず。洋書を讀むときは常に其の猛獸の危難に際し、樂を奏して以て其の難を免れたるの例證少なからざるを見る。詩に曰く、嗚呼我れ石を擊てば、獸あり率ひ舞ふと。嗚呼音樂の生類を感動する斯の如し、以て其の勢力の大なるを見るべし。我等は尚進んで其の影響を述ぶるあらん。

第一　徳育上の感化力

音樂は人性の自然に基き、其の心情を感動するものなれば、喜悅の歌曲は以て人心を

喜ばしめ、悲哀の歌曲ハ以て人心を悲しましむべし。故ニ又正雅の歌曲を唄ふときハ、中心自ら正しく、中心自ら正しき時ハ、邪惡の念外より之を犯すこと能ハず、内ニ邪惡の念なき時ハ、心自ら善を好し惡を避くるに至るハ情の常なり。是を以て心を正ふし、身を修むるものハ音樂ニ如くハなし。語ニ曰く、禮樂ハ須臾も身を去るべからずと。

夫れ人幼時にありてハ腦力未だ薄弱ニして、感動觸激最も鋭敏なるを以て、從來善惡の別を現えすハ則ち此の時の薫陶如何に原因せざるハなし。故に此の際善良なる歌曲を援くるならバ、温良雅正の徳情を涵養する決して疑ふべからざるなり。

第二　和樂の情を生ず

夫れ三軍の將、千軍萬馬を率ひ、井然之を指揮する、恰も自己の手足を使用するが如きに至らしむるも、平素其の部下の士をして和諧の心情を育成するニあらざれバ、決して能ハざるなり。獨り戰場に於るの兵士のみならず、和諧せざるの子弟ハ鬪爭を好むの生徒となり、家庭にありてハ不和を生ずるの子弟となり、世上に出でゝハ不信の人民となる。此れ等不信の人民の世間ニ害毒を流すハ實ニ尠少ならざるなり。嗚呼和諧の心情も實ニ必要なることなり。而して此の和諧の心情を發育するハ何に依るべきかと問ハゞ、我等ハ猶豫なく答へんとす、音樂の力に依らざる可からずと。蓋し音樂ハ

同情相憐み、彼此相親睦するの至情を感發するものなり。

第三　快樂の情を生ず

夫れ人たる者貴賤を問はず、賢愚を論ぜず、苟も快樂なくして一日も生存し得べきにあらず。然れども快樂の種類も少なからずして、肉体上の快樂もあれば、心性上の快樂もあり、皆己れの心身上より起るところの憂苦を去り、以て我が生存を安樂ならしめんが爲なり。既に生存上必要なる以上は、不良の快樂を去り、善良の快樂を取らざるべからず。而して快樂の種類多しと雖も、其の至善至良なるものは音樂に如くはなし。是雅正の音樂は人心中最高等の感情を發して、無窮の愉快を與へ邪惡の念を去り、心性を清潔にし、耽色酗酒の醜行に陷るを防ぐの功あればなり。佛帝ナポレオン言へるあり、曰く、音樂は人性上至大の感化力を興し、人心に非常なる勢力を及ぼすものなれば、政府は音樂の一學科に就いては、他より一層の奬勵を勉むべしと。其の他名家の作にかゝる道徳上の歌曲は、深く人心を感動せしむること、道徳を論ずる書物の直ちに智力に訴ふるもの、比にあらざるなり。すべて人心の未だ軟弱なる幼兒を薫陶するの際、之れが涵養をなし、快樂優美なる歌曲を以てせば、其の人心を正路に導き、之をして感染するを得せしむる決して難からざるなり。

第四　國家との關係

前已に述べたるが如く、音樂は人心に非常の感動を與ふるものにして、又其の施法の如何により種々の關係あり。乃ち長音階に屬するものは勇壯活潑にして、壯快極りなく、短音階に屬せる者は憂欝柔輭悲哀の情を生ずるを常とす。故に幼兒を薫陶する長音階を以てせば、長じて勇壯活潑となり、其の精神發育して、有爲健全の心身を養成するを得べく、又幼兒の際短音階の教練を受くるときは、憂欝柔輭の資質となり、無氣力多病の人となるべし。勇健は人の欲する所、柔弱は人の避けんとする所なり、故に學校にて唱歌を教ふるには、必らず長音階に依らざるべからず。昔時希臘のプラトーは國人をして婉柔なる歌曲を唄ふを禁じ、同時に此等の樂器を禁じ、大に國民の勇壯を期したるより、元氣忽ち振ひ、一國の強を致したり。幾度の激戰に依ツて、當時勇壯無比といふ波斯の鋭鋒を挫折したるは、實に茲に基す。インゲル氏の述ぶる所に依れば、長短兩音階の多少に因り、其の國教育の進度を推知すべしと。茲に歐州各國の近況を擧ぐれば、

國名	長調	短調	長にも走り短にも止るもの
日耳曼	九八	二	
瑞西	九二	八	

葡萄牙	八五	十三		三
愛蘭	八二	十六	外二	
西班牙	七八	二〇	二	
英倫	七八	二二		
蘇格蘭	七二	二五	三	
佛蘭西	七〇	二七		二
希臘	七〇	三〇		
土耳其	六四	三六	六	四
伊太利	五八	四二		
匈牙利	四九	五〇	一	
嗹馬	四七	五二	一	
那威	四〇	五六	二	二
魯西亞	三五	五二	一二	一
瑞典	一四	八〇	四	二

第五　勇氣との關係

勇氣を鼓舞するゝも、實に音樂に如くはなし。故に軍歌の如きは殊に必要のものな

り。歐洲各國皆國歌と定むるものある、また宜なるかな。英國の「ゴツド、セーブ、アワー、クイーン」佛國の「マルセーユ」の如き最も著名のものなり。嘗て英佛の戰爭の際英兵中最も勇猛なりしはスコットランド人なりき。而して此の人種は「スコツトパイプ」を非常に愛し、常に之を歌ひたり。或時將官之を禁ぜしより、軍氣大に沮喪し、大敗を取りたるより、將官はフルガー大佐を呼び、問ふに其の敗北の原因を以てせり。大佐曰く、足下の「スコツトパイプ」を禁ぜしに依ると。將官大に驚き、然らば自由に吹き鳴らせとありたれば、兵士の鬱氣一時に溢れ、勢力數倍して大に佛軍を破りたること多しと云ふ。又佛國の「マルセーユ」は革命の際盛んに行はれたるものなるが、普佛交戰の際にも、佛國の軍隊之を唄ひたるより、軍氣大に勃興し、之れが爲め普軍は五萬人を損したりといふ。日本にても戊辰改革の際「宮樣々々」の歌は、一時の流行となり、大に氣力を發せしめたり。目今陸軍にて、軍隊に切りに軍歌を教ふるも、實に之れ等の目的に出づるなり。



○或人のものせられたる日本史のえしふ　小中村清矩

いそのかみ、ふるのかみよを、もとをしも、しらでやくにの、ひと、いふべき。

○砧衣　山本尹之

うちわびて、ねぬ夜のともと、おもへばか、きぬたのおとも、なつかしきかな。

○幽栖荻　狩野利房

かくれても、世のあきかぜの、おとづれて、あなさわがしさ、にはのおぎはら。

○田舎月　黑田清綱

ものみなの、たらぬゐなかに、似ぬものは、みちたるつきの、ひかりなりけり。

○くさぐさの歌四首　町原熙磨

月琴
秋の夜は、むしの音のみか、絲のねも、さびしかれとや、つきの琴なる。

初雁
夕月の、影もをぐらの、山のはを、てつかふわたる、てつかりのこゑ。

橋上霧
乗るこまの、ひづめもわかぬ、朝霧に、たがならしゆく、瀬田の長はし。

秋別
いつか又、なみだやあきに、ならひなむ、わかる、そでの、上のしら露。

○日本國體伊呂波歌

稲葉厵瞵著述

い　いよ〱神徳顯れて
六合あまねく照臨す

ろ　蠻夷は常に服しける

は　人情風俗淳また美

に　保存す日本の國體を

ほ　變ぜず換へず改めず

へ　徳海内に溢るれば

と　千代に八千代を經るとても

ち　履行し來る世の褒れ

り　擢んず冨嶽は天下の美

ぬ　類は五州に絶えてなく

る　治まる御代の根源は

を　我が皇統は綿々と

わ　かはらず續く一系統

か　世にもまれなる國柄に

よ　大義名分そなはれる

た　例や證據を擧げんには

れ　その君臣の別を見よ

そ　鶴の鷄群にあるごとく

つ　ねたみそねみは更になし

ね　内憂外患あるときは

な　老幼男女の區別なく

ら　むしろ身命なげうつも

む　憂きともせざるのみならず

う　因循姑息の風はなく

ゐ　のち〱毀譽に關すれば

の　おのれ人には劣らじと

お　活潑進取の氣象あり

や　八咫鏡は智となりて
ま　眞璽玉をなはち仁となり
け　劍は則ち勇ぞかし
ふ　不羈獨立の意を示を
こ　この仁信明武の神器こそ
え　夷よ決して比類なき
て　天壤無窮の國體ぞ
あ　安穩無事の萬民が
さ　産業既に擴張を
き　金甌無缺の國制ふ

ゆ　許を限りのたのしみは
め　眼ふれ遮るもの茫々
み　耳よは顫る丶もの嗷々
し　神州の山川風月ふ
ゑ　醉ふて吟じて賞賛を
ひ　批評天下に占めければ
も　毛頭外人あなどらぞ
せ　聖賢代々統を繼ぐ
す　をめらみことぞ萬々歳

第十一號に掲げたる「子を思ふ親の伊呂波歌」の中左の二句を正誤を。

正誤

ゐ　えんもゆかりも知り顏よ
せ　世間も容さぬ不幸の身

○美鼎一臠

内田遠湖

藝術は哲學の有らんかぎり、常に吾人を利己主義の偏隘心より救ひ出すべきものなり。吾人の精神はこれに藉りて闊擴し、忽ち自由に呼吸するを得るなり。造物者が「守獨の」鐵鎖を以て、吾人に鍛ゐ付けたる「自我」の頑石は、これに藉りて容易く溶解するを得るなり。

趣味は特だ表面に手を下すのみ、趣味が形を作して活用く所は、唯その表面の好尚如何を視るのみ。最も趣味を有するものは纖細なり、又趣味に遠ざかる者は深沈と氣力となり。あらゆる道德上の行爲も多少の趣味なきときは、他の根源よりして徒らに堅固となり、嚴刻となり、粗勵となり、狷介となりて終るべし。即ち趣味を得て始めて人は好尚せられ、愛慕せられ、圓滑となり、温和となり、佳妙となり、豊腴となりて、純且つ美なる人の世界を完成すべし。この故に美學的の道德主義は、道德体系の粗處を粧飾するの要具と謂はざるを得ず。されど是れにも堅牢なる基址（哲學的）なければ、恰も空中に浮べる樓閣と一般にて、甚だ危險の結果を誘致すべし。

「美」は特立したる理想的の價直を有する生活に極めて必須なる附屬物なり。宇宙の「美」てふものは決してダルウ井ンの同鄉人の思考するごとく、慈愛なる神が唯人間の爲

に娛樂を與へんとて造りたる者にはあらず。「美」は宇宙と共に生じ來りし者にて、宇宙と共に滅すべし（若し滅し得る者ならば）彼れは一の永遠なる法則に遵ひて、現象の中に於ける理想を表白するものなり。宇宙の「美」は現象の中に表白せられたる理想を吾人に向ひ直接に顯示せんとて、彼れ自らこゝに進み達すべし。又彼の宇宙を以て死せる器械の如く解したる古來の迷妄をも、吾人に向ひて防禦すべし。

極美は正に實事にあらず。彼れは「偶然」の鑛滓より洗淨されたる實事の模型なり。極美は精神の產物なりと雖も、自由的の產物にはあらで必至的の產物なり。極美は又眞理にもあらず、何となれば眞理は實事の特り考想せらるゝ映像なれども、極美は實事よりも善きものにして、眞理よりも多きものなればなり。極美は又幻想にもあらず。何となれば日々實行さるゝものなればなり。特りその極美として實行されざる者は、其の實行に際して諸般の障碍を蒙り、其の翼毛を村薮若しくは荊棘に掠奪せられ、物体の汚穢が之を涴すに由るのみ。若し夫れ極美は人の精神に於て必至的に成立されたる一個の規律的理想にして、我が固有の行爲なることを理會せし者は、徒らに彼の外界に漂遊する者、或は雲の上に玉座を占むる者として探討するの妄誕なるを知得せん。獨り余輩が道德的の理想のみならず、斯の如き極美の構造を希望する人間精神の成立に

對せる空想的、及び論理的の契約は、必ず現象的實事の内に於て之を求めざるべからず。

(嗣出)



○吉野川　　　鴨立庵主人

第五　情に溺る櫂の雫

女「チーもし旦那、どうも妾には解せない所がありますよ。今迄あの通りいツて聞かせましても、猶早いとか何とか云ツて、逃口上ばかり申して居りましたが、今度のに限ツて默然ては居りませんが、何だか承知したといふ素振もありませんし、そして彼の人は一二度、會でお目に掛ツたこともあると云ツて居りますから……。」

男「さうだらうツて、彼の人はこの前娘の所へ手紙を遣したこともあるし、男の方ではあの人が幹事だものを。ウン左様か、それで大抵娘の心も解ツた、先方のことも近所だし、素生は判ツてること、モー今度は宜い加減にして、娘が其の氣なら早く取極めたがよ

い。」

女「そりやア妾も、マア娘さへ承知すれば、大抵の處なら取り極めさいと思ツて居りますが…………。あなたは聞きでせうか、あの山本のお老母さんは大層好いた方だといふ事ですが、この頃御病氣で、今日の話にも兎ても六ケ敷からうといふことで…………。さういふ取込の處だし、萬一な事でもあると、又どうなるか判りませまい……ネエあなた、エ、モシ、アレ嫌な、人にさんざ話さして置いてねエ、何時の間にか大いびきだ。妾はモウ娘のことだといふと、夜も寐ないことが幾何あるか知れないに……。」

川村左近夫婦が寐物語は、——慈愛をこめたる兩人が子を思ふの寐物語は、二階に獨居をなす光子の夢にも、現にも得知らざる所なめり。子を思ふ親の心は子之を知らぞ、親の心は有難き、まして子を思ふに切なる、其の幼きときは、「よく寐ればねるとてのぞく枕がや」。其の少しく年長けて外出をなす折には、歸りのおそきを門邊にまち、暑の夜は團扇持つ手に蚊をはひ拂ひ、寒き夜は身を埋火に衣打ち暖め、日夜差別なく、春秋間斷なく、實に人の母こそ、世をうねの野になく鶴、おのが住所を燒野の雉子として、子を思ひぬはなければ。母としいへば、なべて子の爲には身を焦し、身を凍えしめ、身を疲らし、身を苦しめ、其の辛勞の程、今いふべき限りにはあらざるべし。さもあらばあれ、又これが爲

に、之れが報としては、身の尊を極めて、美味錦繡に其の慾を充たしめ、孫兒を抱きて、その笑顔を見つゝ、老年を樂ましむるのこともあるべし。

山本靜の母は、今や孫兒を抱くの期、優遊老後をたのしむべきの時に遇ひながら、不幸にも病にかゝり、一朝あやまたば、この現世を去りて、將に蓮臺に移りなんとす。山本の一家は宛然悲域歎場を描出し來り、靜、お豐兄妹の周章は、一方ならず、醫師よ藥よの丹誠も其の功績なく、日夜兩人が看病のまこととも神や受けずなりけん、扁鵲匕を投じ、華陀首を傾く。床に臥してより恰もこれ七日の日、母は自ら起つべからざるをや覺りけん、靜お豐を枕邊近くよびよせて、

「靜や、私はもうとても宜くはなられまい。年は充分だし、それにお前方二人が晝夜看病して呉れる………又其の外に何にも思ひのこすことはありません。唯殘念なのは孫の顏を見ないばかりだが、之れとても………　かういふと、又腹を立てるかも知れないが、靜は性質として口八ケ間敷いが、これ丈はどうぞ直して貰ひたい、孫の顏を見ることの出來ないのも、實は其の口やかましい爲だから………これも妾の仕込みの惡いからの事で、仕方がないといへば仕方もないが、どうぞ是非母の遺言まで斯ういふたと思ツて、是非改めて、ネ靜、妾が願ひますよ。　それに、もひとつはお豐のことですけれども、

彼女もモー二三年たつと、年頃にもなりますし、ア、云ふ我儘ものだから……成るべく温和い――人あの宮島様のやうな人の處へ片付けてね。　お豊や、お前は今も云ふ通り我儘ものでこまるから、これからは兄様を私と思ふて、能くいふ事を聞くのですよ、決してどんなことでも兄様のいふ事に背いてはなりませんぞ。　それに暇さへあツたら、兄様に學問をおならひなさい。　二人が今いふ事を聞いて呉れたら、もうわしは喜んであの世……イ、エもうそれで安心して…………………。」

鳥の將に死なんとする其の鳴く聲悲し、人の將に死なんとする、其のいふことよし。今母が臨終の一言――兩人が後來の言行に就いての戒め言を聞きては、兩人は身も世もあらぬ思ひ、兩人ひとしく、

「おツかさん、何故そんなことをお言ひなさる。」

兄はさすがに其の語をつぎて、

「お母様皆御尤の事です。然しなぜそんな氣弱い……心細いことをおツしやるのです、早くよくなツて下さらんと困ります……　あとに殘るものは丸で子供兩人ですものを……………。」

この語を聞くや聞かずや、見る〱母の吐息は一際はげしく、玉の緒もいと〱細りて

將に絶えなんとする有様なり。これを見るより兩人は、左右より母の耳元近く聲立てゝ、「母よ……」「母よ……」となき叫べど、却りて歸冥を送るの詞となり、少しも其の甲斐とてはあらざりけり。まさにこれ慈母孝子恩愛の情一時に蝟集し來りて、心を動かすの時、兄妹兩人の聲涸れ目腫れ、兩の袂は絞り盡して、身は恰も涙の瀨、拭へども乾かず、拂へどもおつ。嗚呼この涙――そも如何なれば出づるこの涙、涙ぞ人の誠なる、一滴の涙は則ち千萬無量の情を含む。嗚呼この悲域哀場の委曲なる有狀を寫し出さんには、主人の筆に潜越の譏を招かん、讀者よほど〳〵に察を下さねかし。

折りしも飛ばせ來りし一輌の車を山本の門前に留めたるものあり。案内をも請はずして突と奧の方へ入りしが、方に親子死別の眞中なるに驚き、ものをも得言ひ兼ねたれども、其の獨り突然立ち居るに忍びざりけん、兩人が「母よ」「母よ」と叫び出づる聲と共に、

「おッかさん、〳〵、〳〵、　オイ山本君、コリヤー大變だ。さうして醫者は居ないぢやないか。うろたへてはいかんぜ。吉報を聞かさうと思ツて、勇んで來たけれどころではない。醫者は例の神樂坂のドクトルか。さうして君親類へ使を出さう。何處〳〵、かね。」

○美人車

飯台思案外史作

其三——腸を斷つ乙女が物思ひ。

「大層今日は常時もよりお早いやうでございますネ

常時もながら可愛らしい声。夫も聞人が聞人、今話しかけられた者には如何ばかり。伽陵頻迦もなんのその、

「ア、(何故か口籠る)今日は子　旦那が御役所から直ぐ外にお廻りなさツたもンだから、

「オヤ　さうでございますか(嬌笑を洩らして)かうやツて貴所は毎日の様に買に来て下さいますが(一トつ息を切る)全体お宅は何處です?

思ふ坪。渡に舟。毎日の様に買に来るのも、元を糺せば、かうやツて親しく——馴々しく話しかけられたいばツかり。何條猶豫の候べき、が思へば何んだか……恥かしい様で……楫棒握る車夫風情でさへこれですもの、情を知らぬ人は無いと見えます!

「エ、わツちかい?　わツちは白山に居ます。

何んだか改ツた返答。

「白山は何處？

「白山は……指ケ谷町で……

娘はくどくも聞糺したい風情。ハテ？

「指ケ谷町は何番地で居らッしやるの？

「エッ　番地かい　番地は卅五番地サ。

此れが往來で通りが、り　田舍者に道でも聞かれうものなら　舌打もせんよ、イケ可笑しな奴ダ・と云はうものを。　不思議と思ッたのも云ッて仕舞ッた跡の事。ナニ丸で不思議と思はない程。問はれさいが結句　嬉しいとは、ハテ妙なもの！

「オヤさうでございますの、　それならそんなに御遠方でもございませんね（寧口腦殺すると云ふ風の笑ー二ツ　三ツ）お名前は何んとおッしやるの？

此處で流石の男も考へた。なんしにそんなに詳しく聞糺すのだらう？　不思議ダ……とは思ッたが、其處が人間の悲しさ。自惚の鎌は巧に怪訝の芽を刈ッて行きます、が少しは變と思ッたのか、

「エッ　名前かい？

「ハイ　失禮ながらお名前は……何んとおッしやる御邸にいらッしやるの？

何んの爲め？　男ー充分引け目のある男ー何んで問ひ返す勇氣があらう？　直ぐ答へた。

「駒形芳文とおツしやるー大藏省にお出になる官員さんのお邸に居るンです、テモ改ツた答辯！　シツ！　云はないでもいゝ事まで、聞きもしない御役所まで、下郎は兎角口の善惡なきもの、娘は首傾け　駒形芳文。ハテ丸で名前が、只芳文の芳が芳之助の芳に適ふばかり、一字位同じ名前は世間にいくらもある、同名異人さへあるもの。併しどうも面指が……それも他人の空似とやら。シテ見ると、どう考へ直しても同じお方ぢやアないか知ら。怪しむに附け顔の色も今迄の艶々しさも其色を消します。矢ツ張心の迷か知ら？　が、どうも……どうしても、アノ目附、アノ口振、ア、思ひ出してもいやになる。車夫は此娘が不興な顔を見て、自分も其不興の半座を分ツた。心の中で　エーてんな事なら、名前なんぞ　云はなければよかツたツけ。

「さうしておまい、私ン處の旦那を御存じかい？

胸に一物アリ樣は、此間も仲間の噂話。此娘には立派ないゝなづけ……レツキとした旦那がある……若しや万一、私ン處の旦那を知ツて居るンぢやないか、併しそれはあんまり、邪推過る、どうも思ひ過すと邪推は何處まで手を延す事やら分らない程、

それは又仲間の奴等が己を擔いだんぢやアないか思ひ返すと尚々戀心ははびこるもの。是非も分別もいツたものでない。何かモツト談話を續け樣としたが、偖かうなると捕へ處が無い—手持不沙汰—可笑しい程。

「ア、大變遅くなツた、モウ歸らう

シツ！　斷らずもがな。思ひ出した樣は云ふ丈尚可笑しさは增すです。

「マア　い、ぢやアありませんか、モツト話していらツしやいナ。

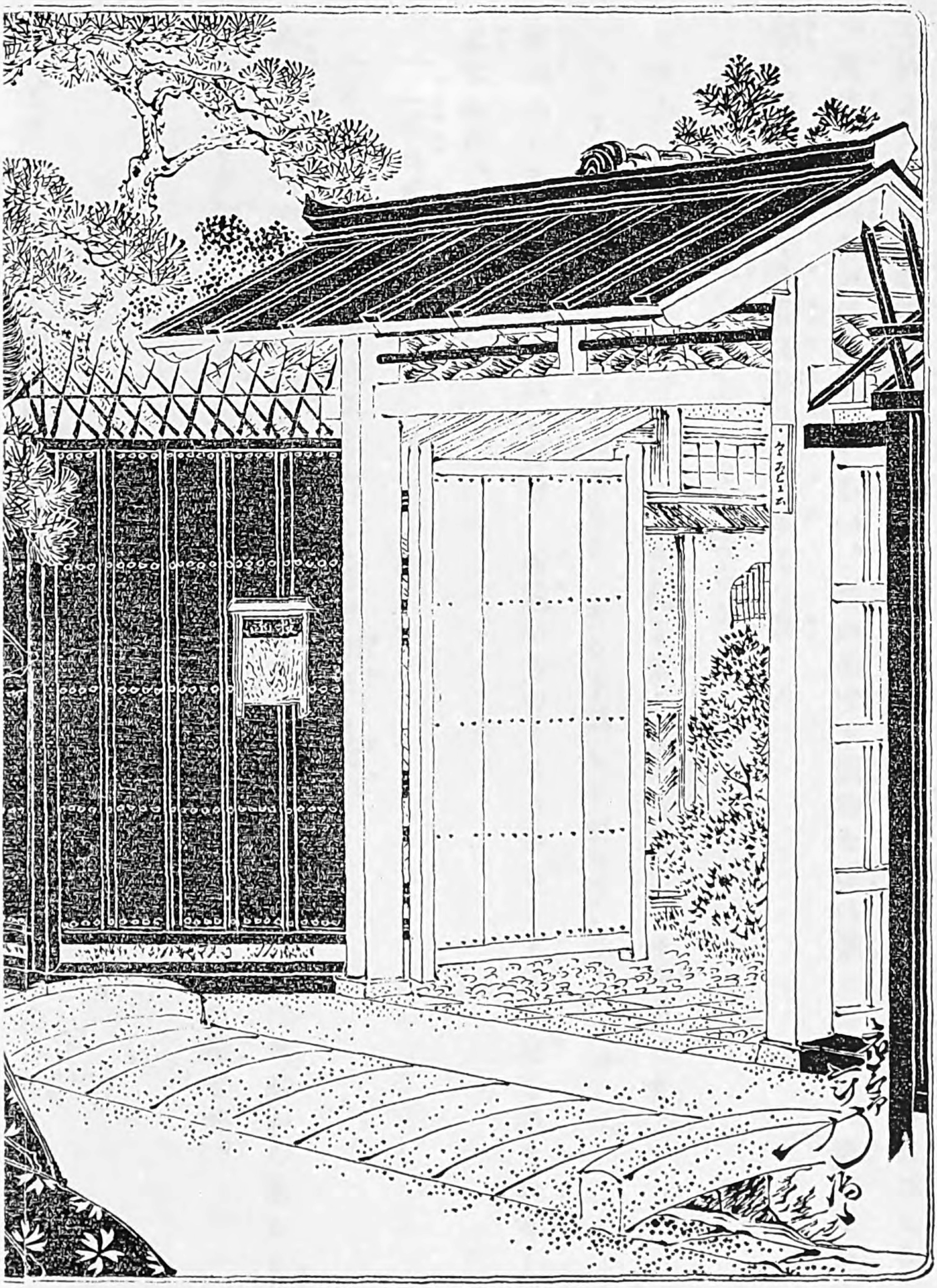
偖止めらるれば止められるだけ　居惡いもの—かうなると—又明日も來られる—思ひ直したか、

「又明日來やう

「オヤ　さうでございますか。　どうぞ明日も是非……

此娘—可憐の小女—店先へ腰を掛けて往來を見るのが恥かしかツた時から見ると大違—習ふより馴れろ—商賣氣質はもう二三遍繰返して讀んだかの樣です。

「どうしてもアノお方に違ひない樣だ。　どう思ひ返してもアノお方に……　オヤ　モ





ウ　跡見女學校の前へ来た、太い吐息をツキ頃日頃、思ひ思ツた夫の事、ア、妾でも人並に育ツたら、アンナ學校へ入ツて、リードルの一冊位ハ習へさうなもの、ホントにア、ヤツて紫の本包をかゝへて通る娘子を見ると、どんなに羨しからう、どんなに口惜しからう、流石感慨ハ乙女が狭い胸板を貫ぬきぬ。よしあのお方にしろ、妾がコンナ風でハ、所詮お目に掛られた義理でもなし、若し又お目に掛ツた處が、どうして妾が貴郎のコレ〳〵と申す事が出来やう、イクラ鐵面皮だツて、却ツて恥を暴す様なもの、ア、歸らう〳〵、二足三足戻ツたが、引かるゝものハ後髪のみかハ。責めて門口までゞも……ヨシれ目に掛られないにしろ……お内の様子でも、又歩は前へ進みます。

「温泉の御近處と云へば　モウ此處等邊だ。慥か右側と聞て居た。

見上る眼ハハヤ露の玉を碎く、

「オヤ彼處でハない、アノ次の冠木門の家か知ら、オヤ彼處でもない……なんでも黒板塀か何か餘程立派なお家だと聞て居たから、アレに違ひない、アソコの黒板塀のお家に違ひない。

乙女が胸ハ今更の様に轟く、

「ア、そこに違ひない。從六位駒形芳文とかいてある。

見れば立派な冠木門、黒板塀は其威嚴を增させます、常盤なる松が枝は塀の上から外面を覗いて居る樣。見るから立派な—裏店に住ふ乙女には尚更立派に見える一ト構。門の前に敷き詰めてある花剛石、どうして此娘の下駄の齒に踏まれうぞ。

「ア、歸らう〳〵たとへカウ〳〵と名のツた處が、アノお方に恥をおか、せ申は樣なものだ。どうしてコンナボロ〳〵した身裝で(漫ろ泪の襤褸の袂に雨なき)どうまアオメ〳〵と行かれませう(泪の雫は續けざまに……)丸ツきり違ツたお方であらうものなら……ア、歸りませう〳〵

恨しさうに表札を見詰る目元、千萬無量の思を籠る。哀さとも。いぢらしいとも。スゴ〳〵戾る半町ばかり。急に思ひ出したか

「折角此處まで來たもの、責めてアノ方が妾のコレ〳〵といふ事ざゝでも……責めてアノ方が妾の夫といふ事だけでも突止めて歸らう

獨り言云ふ內に、身はハヤ又其門前に來た。此度は思ひ定めたか、ツカ〳〵ツと敷石を踏んで門—表札の打ツてある門の傍まで來たがどうしても其中へ這入る勇氣がないと見えます。

「よし上ツた處が、モウ屹度レツキとした奥様がおあんなさるに違ひない、おあんしに何時まで妾が来るのを待ツていらツしやるものでそか。ソレも親と親との口約束。少しの間はご一處に居た事もあツたツけが……何時まで　コノ見る影もない妾を何時まで待ツていらツしやるものか。若し奥様でもいらつしやらうものなら、それこそ妾の恥……

アゝと右の方―臺所の方を見ると、アラ…奥様らしい人品のいゝ婦人が納戸の方へチラ〳〵。見ると其影は襖の彼方へ消えた、が、微に娘が耳朶を掠めるかんばしツた聲―

「奥様引　只今ツ

娘が胸は張り裂くばかり。

「アゝ駄目だ〳〵　早く歸らう　コンナ事に隙取ツて今日は大變遅くなツた、嘸叔母様が待遠しがツて居らツしやるだらう

見返り〳〵。今や敷石を離るゝ折しも。矢庭に此邸内へ引込む一輛の車。娘は周章て身を板塀にヒタと寄せた。車夫の聲。

「お歸り引

思はず振向く娘。玄關の式臺には書生らしい若者二三名、其奥に手を附いて居る婦人
―人品のいゝ婦人
門の蔭から瞥見した乙女が胸の中！　熱腸寸斷。

（嗣出）

○花嫁御　　文庫の　漣山人作

晝の段

良人は役所へ出てしまふ。あとで奥座敷に只一人。例の火鉢の側の舊の座に直ッて見ても、何だか客に来さやうな氣がして、これが行末永くわが家になり、此の床の上で寢食し、此の天井の下で、髮も白くするのだとて、まだどうも腹に落ちぬやうな心持。妙にこそばゆく感じて、氣はソハ〳〵するばかり。丁度旅に出た初めての日、ある旅宿に着いた時の塩梅。嬉しいやうでまた氣遣ひなやうで、魂は今、身に添ふて居るのやら居らぬのやら、持主の當人さへ分からぬぞ。火鉢に掛かッて居る鐵瓶が、夢中に成て蒸氣を吹て、今にも灰神樂を奏でさうなのにも、一向氣が付かぬ樣子。――只時計のセコンドのみ、一間中に跋扈して。

その中に精神も落付いてくる、隨て思考も定まッて来て、腦はそろ〳〵眞面目に働

きはじめた。まづ最初に浮び出したは、そもそも自身と良人との關係。妾が初めて夏夫さんに逢ふたのは、忘れもしない妾が九才の時。その時分はあの方のお父さん――いやだよ妾のお父さんだのに――丁度自家のお父さんと御同役であツた故、兩方の家が懇意にして、始終往来をして居て、妾も姉さんと一所にお母さんに連れられて此の家へ遊びに来たこともあツたツけ。その時分こそ妾はから子供ざツたし、夏夫さんも十六だツたから、もう妾なんぞと一所に成て遊ぶ年ぢやないけども、よく信切に……妾達に畫を見せたり、又此方からねだると、種々面白い話をしてくだすツた。今でも覺えて居るよ、あの熊と王樣の話。あんな話を聞てよろこんで居さのだ子ー。それから十二の時だツけ、お正月に自家の二階で歌骨牌をした時、夏夫さんと妾が――どう云ふ拍子か一遍も組にならず。姉さんがよく組に成く、そして一生懸命に取て居たが、妾そあの時なんだか面白くなくツて、皆の止めるのも聞かず、とう〱仕舞に仲間と抜けて下へおりてしまツたけども。やツぱり氣になるもんだから、また揚ツて行て見て居たら、夏夫さんが、=あなたお這入りなさいナ、私と組で勝てやらうぢやありませんか=ト云ツた。その時は嬉れいやうだツたが、氣安めを云はれると思ツてそ、その言葉恨めしくとう〱、強情張ツて

這入らなかツた。ほんとに考て見ると、妾は其時分から邪推深かツたのだネー。悋氣──嫉妬、アヽいやだ……。むかしから此が爲に亭主にさられた例は幾つか……アヽこれからは氣を付けましやう、氣を付けましやう。それから段々大く成て妾が十五六の時分には、もう全く夏夫さんを……、慕ツて居たのらしい。したが其時分の妾の心配は……、あれを夏夫さんに知らせたいワ。夏夫さんの家と妾の家とは、親類の様に懇意にしたとだから、事によると夏夫さんのお嫁は、妾の家から行くやうになるだらう。それに付ては姉さんか妾の二人の中だが。妾はまだ小供見たいなものだし、姉さんはもう十八のとだから、ヒヨツとして姉さんが行くのではあるまいか。もしそんな事だツたら、妾はどうしやうと思ツた。そして氣の故か姉さんも、何だか夏夫さんを慕ふやうに見えて……、ほんとにどんなに氣をもんだらう。それから人の居ない時には、三世相をくツて相性を調らべたりして……、あてにならぬと、は思ひながら、──矢張り愚痴になるんだ子ー。だが姉さんが松本さんへ御嫁に行くと云ふ事を聞いた時には……、あの時の嬉しさはなかツたヨ。それからは今まで氣の合はないやうに思ツた姉さんが、急に可愛く又氣の毒に成ツて。そして自分ではもう夏夫さんの處へ来たやうな氣に成てしまツた。もしあの時姉さんが此の

家へ来たか、夫れとも妾が余所へやられるに成ツたらどうだらう。妾は此度死でしまツたヨ。死なぬにしても氣が狂ツたに相違ない。ほんとに戀の爲には、人間が馬鹿に成たり、また非常に鋭敏に成たり、人が惡く成たり善く成たり、まるで戀に使われるのだネー、考へて見ると恐ろしいものだよ。然し其からは妾は一層勵みが付て来て、學校の事にも勉強し、自分の擧動にも氣を付て、一寸雜誌を見るにも今までは夫んなに面白いとは思はなかツた家政とか、家事經濟だとか云ふ處に目が付くやうに成たのも不思議なことだヨ。夫れで去年あたりから、夏夫さんはいよ〱妾の良人と……まだ聞きはしなかツたが、大方推量がついた時には、もう妾は嬉れしくツて、世間に妾ほど幸福者があるだらうかと思ツた位だツた。が、さて願がかなツて、斯う云ふことに成て見ると、また氣遣でならない。もし妾が氣に入らない時にはどうしやう、夫してもし離縁でも……ヒヨツとそんなことに成たらどうしやう。然かし嬉しいことには、夏夫さんはあゝ云ふやさしい方だし、お父さんもお母さんもみんなよい方だから、ほんとに仕好い訳だけれども。世間にはあるやうな、嫁が氣に入らないで亭主が放蕩はじめたとか、……亭主の氣に入ても、舅や姑と折合が惡くツて、飽きも飽かれもしない仲をさかれたとか、よくそんなことがあるが、妾に

はまさかそんな事はあるまいと思ふけれども只心配なのは病氣だ。あの伊藤さん見た樣に、嫁に行てまだ一年もたつかたゝぬに、御亭主が肺病で……、アヽいやな事〳〵。が、夏夫さんには肺病なんぞはなし、そこは安心ざゝども……。それも永い月日の中には……。アヽ馬鹿だねーこんなつまらない事ばかし考へてサ。行末の事は案じたとて仕樣がないが、さし當た處で……。今日からは妾が此家の奧樣に成ツて、女中や男達を使はなければなるまいが、——これが心配でならない。——下女など、云ふものは、よく主人の家の譏謗を云ひたがる者だから、實に使い惡いよ。好くしむけきは馬鹿にして増長しやうし。少し嚴しくすれば、余所へ出て彼是陰言、夏夫さんの名を汚すやうなことを。……何うしたらよいだらうねー。さうかと云ツてまさか一々良人と相談もならぞ。これを一人でやツて行くのが、妾の役目なのだから。——何を云てもまだ年は若し、經驗は乏しいし、初めの中は馬鹿にされても仕方がない、それでもし六借い事に成たら、お隣にお母さんも居らツしやるし、御相談申せば　。只々良人の機嫌のよいやうに、家内は旨く治まツて行くやうにしてさへ行けばそれでよいのだ。どうかさうあり度いものだ。——ほんとに世帯を持つと、心配の多いものだねー。——アヽこんな弱い了簡では、一家の妻君は覺束な

いよ、ほんとに……。

初めて往事の再想。それから将来の構想、はては眼前の事に移ツて、種々と心を巡らすのが苦しいやうでまた楽しみ。暫らくは思案に餘念もなかツたが、急に心付いて、‖只斯うして居るのもつまらない譯、それよりは毛糸でも出して、良人に穿かせる靴足袋でも、(先前見たら今穿いて居るのは、踵のあたりの地も薄く成て居た、丁度よい新規に仕かえて進ぜましせう)‖。立上ツて押入の中から、姫路革の文庫を出し、其から毬にまいた毛糸と、鋏の編み棒を四五本出して、また舊の座に返り。細い指で棒をあしらひながら、覺えの腕、——その速さ。——毛糸の毬は膝の下で躍ツて居た。

すると庭の方で、‖お冬さん‖。可愛らしい男兒の聲。「春さんですか」、毛糸下に置いて急がしく立上り、障子あけて椽側に出て、「よく入らツしやいましたネ、お一人」。「イヽエお母さんと」。「何邊に……」、見まそせば、四五間後れて、姑は庭下駄を引ずりながら、ニコ〱進んで來て、「さぞ淋しからうと思ツて」。「まア入らツしやいまし先き程はどうも」。丁寧に辭義をしたが直く立て中へ這入り。四邊を片付けて、「サアお揚り遊ばせ」。「もうかまツて下さるなヨ」。「イヽエ、どうぞ此邊へ。サ春さんも揚ツて下さいナ」。「それぢやア……」姑は座敷に通るを、坐蒲團進めて席漸く定まるとゝ、

此物音を聞いてお秋は次からやツて來て、姑を見るよりかしこまツて慇懃に禮をのべ「御機嫌よろしう」。「ハイ、お秋さんまア此度は御苦勞でした」。「イヽエあなた、行き届きませんもので……。オヤほツちやま、いつも御元氣でございますと。よいお姉樣が出來て、さぞお嬉しうございましう子ー、ホヽヽ」。またお冬の方を向いて「お湯をさして參りませうか」。「お湯はあるよ、それより子なんぞお菓子を……」。ハイ畏まりました」。立て行た。　支那焼の茶碗に玉露汲で出せば、姑は之を吞みほし、嫁の膝の側にある、毛糸の編みかけ見付けて、「オヤもう毛糸が出ました子」。「ヘエ只今ちよいとはじめました許りなのでございます」。「お冬さん今度僕にも編んでくださいな」。「エヽあんであげましやう子、何にしましやうシヤツポですか、靴下がよござんすか」。「僕はシヤツポがいゝや」。「色は、どんなのがお好きです。海老色ですか、瑠璃色ですか、それとも赤いのが……。」「赤はきらいだ……瑠璃色ツてどんなノ」。「青いやうなのです」。「アヽ兄さんの襟飾りのやうな」。「エヽ、よく氣が付きますと子」。「アヽ、ぢやアあれがいゝや」。「それぢや直きあんであげましやうネ」。處へお秋は、九谷の菓子鉢にカステイラを切て持て來て、「サア一ツめしあがれ」。「春の大好きな物が出た子」。「おすきでございますか、ぢやア澤山めしあがりまし。また秋が切て參り


桂舟



ますから」。「失敬ナ、そんなに喰れるもんかイ」。「ホヽ、御免遊ばせ。
姑は先刻から頻りにお冬の髪に目を止めて居たが、「ほんとに格好がよく出来ましたよ、是はお秋さんかイ」。「イヽエ奥様、今朝程撫付けておあげ申したばかりでございますヨ」。「さう、まアほんとにいゝ格好だ。鬢の工合が……お冬さんには島田が似合ふネ」。「さうでございますか、ホヽヽ」。「ほんとにサ、妾はどうも束髪より島田の方が上品でいゝやうに思ふヨ。矢張り舊弊なんだね」。「奥様、妾も島田の方が好きでございまして……。それに此のお嬢様には、よくお似合遊ばしますから、始終お進め申したんでございますヨ」。「もうお嬢様ぢやないやね」。「オヤマア、どう致しませう、ツイ口癖に成て居りますもんで……ホヽヽ」。黙ツて聞いて居るお冬こそ、——何と云ツてよいやら、——只顔を赤くしてお附合に笑ひながら急須に湯をさして居た。すると又襖の處から例の中働が半身を顯はして、「アノ御隣りの奥様、御飯でございます」。「オヤもうお正午かね、ハイ今歸りますヨ。サア春や行きましやうヨ」。「僕はもツと遊んで行かう」。「御膳たべてまた来ればいゝぢやないか」。「だツて……」。「ようございますヨ、此方の家でお喰べなさイ」。「さう遊ばせ、姉さまと御一所にお上り遊ばせナね」。「アヽ」。「こまるね此の兒は」。「ナニよろしうございますヨ、妾と一所に喰べ

ましやう子、春さん」。「飛んだ御厄介ですネ」。「それぢやお前御馳走に成ツてお出で。……左様ならまた来ましやう」。「どうもおかまひ申しませんで……」。お冬は椽側まで送る。お秋は下駄を直す。春二は中で寝轉ろんで、新聞の繪を見て居る。――此の時號砲、それに促がされて時計までが、――まづ半日經ちました。

「それではお膳をだしておくれ」。「ハイ。ぼつちやま、貴君何がお好きでございます」。「僕は玉子が一番すきだ」。「お玉。ハイ、燒きますか、煎ましやうか」。「燒く方がいゝ」。「なんにも御馳走はありませんヨ、それぢや別にお玉を燒いて……」。「ハイ」お秋は次へ。

其中お冬は、あたりに算を亂ごした茶碗、菓子鉢などをかたづけ、こぼれたカステイラの粉を掃除し。膳の出るまでと、編みかけさ毛糸をとりあげてまたはじめた。春二は側へ寄て来て、「何こしらへるノ靴下」。「エ、」。「誰の」。「あなたの兄さまの」。「速く出来るもんだナ、お冬さんの學校でこんなものを教へるノ」。「エ、教へますヨ」。それから子春さん」。少し小聲に成て、「アノこれからネ、妾のとをお冬さんと云ふんぢやありませんヨ。姉さんと云ツて頂だいヨ。名を云てないで子」。「姉さん」、不審さうにお冬の顔を見て居た。

間もなく膳が現されて、午飯もすむと、「アノ……姉さん、寫眞見せて下さいナ」。寫眞、誰の寫眞とでも。」「アノ兄さんの御部屋にある……兄さんが居ると叱られるから留守の間に見てやらう。」いそがしく立て次の間へ行たが、やがて革表紙の立派なアルバムを持て来て、投げるやうにそこへ置いた。「オヤ奇麗な寫眞入が出来ましたネ。」毛糸あむ手を休めて窺き込む。見ながらあけて行く一枚々々。——初めには中版で舅と姑が。次に家内總てが一枚の中に、——今度寫す折には妾も此の群に入ると思へば樂しく。それから自分の父と母。またあけて見ると嬉れしや、自分がツイ此頃寫した半身の洋服姿が、良人のにこやかなマンテル姿と相對して……。ギツと吾ながら見とれて居た。段々奥へ行くと、良人の朋友や又は良人がむかし書生であツた頃の種々な姿、はては十二三の時分のあどけない俤を見ては、思はず袖も口に當る。それから又見て行く中、そこにまだ初節句もすまぬ頃の春二が、母の膝の上に居るのを見付て「オヤマア可愛い事、これは誰。」「僕さア」。「よく御存じです子。」心の中では、やがて妾も此の樣にと……、眼に見えるやうで。——するとその脇に、冠切り姿の十才ばかりの可愛らしい乙女が……、よく見れば誰あらう自分。そゞろ昔時忍ばれて、その罪のない顔に對しては、今更耻かしいやうな心持もする。「今度一所に寫しましやう

子し、お冬さん」。「エヽ、またあなたお冬さんて……」。「アヽさうだッけ、姉さん」「ホヽヽヽ」。

一時も打ッてや、五六分たッたと思ふと、又候お秋が出て来て「アノ髪結さんが參りましたが、すぐとよろしうございますか。」「……もう少し待ッておくれ。」「僕はもう歸らう」。「アラまだい、ぢやありませんか、もッと遊んで入らつしやいナ」。「午後から遊びに来る奴があるから、また来ますヨ」。アルバム元へ仕舞ふのも忘れて、急がしく立て行く、椽側から庭へ下りて「姉さん左様なら、御馳走さまッ」。障子の處まで出て「お母さまによろしく」ト云ッた時は、春二の頭は生垣のすき間から見えるばかり。「それぢやすぐ髪を直してもらひましやう。」

髪を結ふのは、例の湯殿の側の鏡臺の置いてある處、鏡臺の側には半疊の蓙に、黒い紙の櫛などが廣げてあり。上には梳櫛、鬢櫛、髮筋、荒櫛、中櫛、鬢附、すき油、水油などの道具、櫛もまだ油に染まぬ、元結は束のまゝ、そつくり。鏡臺の前にすわると、やがて十八九になる髪結、――これはすき手と見える。――後の方から、辭義をするのを、よいほどに一寸返禮、鏡の中の吾に挨拶。すき手は立上ッて後へまわり、簪、根掛、すべて取りはづしてしまひ、鋏取て惜氣もなく、元結をプツリ〳〵。

○残らずほどいてしまツて、髪をすきはじめながらも、折々窃むやうに鏡の方を：：。自分の顔と見較べては、＝おなじ女に生まれた中には、斯うした美人もあるものを、なに腹立て、母様が妾をば此の様に＝ト、今更の様に鏡訴訟、吾身恨めしく、此人憎らしく。まき櫛わざと深く入れてグイ〳〵、――西施の八の字、ある程かうもあらうか



○文明之母第十三號の附錄漫評　　出雲　G、T、

表紙の誰が袖の色摺、絶艶絶麗といふべきの外なし。」

佐々木光子女史の十六句今様ぶりの「戀しき故郷」は文字の如何にも錬れ居ると、實に閑然すべからず。余は隨分和歌につき、特に今様ぶりにつきては八釜敷方なれども、此の歌を見ては一言も出でざるぞ殘念なる。「みぎはのさくら二葉三葉、ちりてながる

、すみだ川」と起して、常に其の意に出入し、「波間にうかぶみやこどり、いざ事とへんなつかしき、」更に歩をすゝめて「わがちゝそゝはそらからは、いへど答へぞあそぶなり」とむすびしは何等の才筆ぞ、何等の慧筆ぞ、疑眉の男子疑を剃らざるべからず。』

南翠外史の「流行の下遷」は外史が慣用の文字を用ゐずして、優しくかきつゞねられたるものなれども、意味の通ぜざるところなどありて、別段面白からず、モ一層の御鍛錬ありたかりし。但し是は南翠外史として申したること、若手の手に成りしものならば、妙なり妙なりと賞めた、へへんのみ。』

思案外史の「美人車」はあらずもがな。

後殿の鉄筆将軍の「八重菊」は如何にも壓巻、悲哀小說の上乗と見しはひが目ぅ。

美妙齋氏の「蝴蝶」もこれを見れば何のその、紅葉氏の「いろ懺悔」又之ありて色なし。

實に余は客觀的に觀察するも、唯高潔あるを見るのみ、主觀的に觀察と下すもまた唯高潔なるを見るのみ蓋し「八重菊」の一篇は高潔を以て勝るものなり。或人は沙翁の悲曲を評論して Charactertragodie. といひたりしが、余も本篇に於いて斯くいふの過褒にあらざるを知る。但し其の下の巻正儀の述懐を叙する處、遐想 Schwaermen. にのみ趨りて、歴史的に叙述せられざりしは余の大に惜む處なり。若し馬琴をして之を記せしめ

は如何、余は必ず翁が數多の歴史的の材料を疊記し來るべきを知る。勿論其の史跡の如何にも模糊として探究すべき所なきは世已に定論あり、然れども其の模糊たるを明瞭にし、探究すべからざるを探究するは、是れ大小說家の任たり、時代小說 Hietovical Romauce の役目なり、況んや賴襄の論文の如き、更に數歩を進めたるものあるに於てをや。

○本誌第十三號に對する讀賣改進の兩新聞の批評

今日我が幾多の新聞紙に於いて、文學的の趣味を帶び、砂漠中のオーサスともいへるは讀賣、改進兩新聞は、我が文明之母第十三號に對し、左の如くに評したり。

改進新聞の評（十一月十日紙上）

生文社發行の文明のは、は、本月三日第十三號を發行せり。記載せる所の論說、雜錄等多くは大家の寄送に係り、体裁も亦善美にして、先づ閑然する所なきが如し。殊に本號には別に一部の附錄を添へ、是には佐々木光子氏の「戀しき故鄕」南翠外史の「流行之下遷」、思案外史の「美人車」鉄筆將軍の「八重菊」の四題を載せ、其の表紙は誰が袖の圖を、極めて艶麗なる色摺とし、婦女子の之を手取らんには、再び下に置くを惜し

むならんと想てる、程なり。同雜誌は是迄毎月一回づゝ發刊し來りしが、本月より二回發刊とし、即ち毎月三日と十八日とを以て定日とす。

讀賣新聞の評（十一月八日紙上）

日本橋大傳馬町の生文社より出る文明の母て、今回より毎月二度發刊する事とし、大に紙面の改良を爲し、且添るに附録を以てせり、其第十三號には佐々木光子女史の戀しき故郷令樣ぶり四首、南翠外史の流行の下邊といへる演藝協會に寄て奢を戒しめらる、御議論、思案外史作の美人車、及び鉄筆將軍の八重菊といふ面白き小說を載たり。記者多忙中附録文一讀せしに、光子女史の令樣は無難なり、總べて斯く定まりしものは其体其口調ともに飽くまで先人の規に從ふをよしとせ、別に機軸を出さんと欲せば須らく古人の糟粕に依らず、已れ自ら一体を創むべし、若し然せざる時は、在來の文學は總べて消滅し了るべし。次に南翠外史の御文章、江湖自ら公評あらん、既に羽に公を冠ッた方々の御物は、記者如き小供の評するものにはあらざる由、小笠原家の諸禮式に見ゆ。（どうだか）次に思案外史の小說不思議に上出來、能くさゞを離れて何となく實況眼前に搖曳せるの感ひあり。乍去十一ページ二行目灣桃色の頰を窘める此窘めるといふ文字即ち外史流の一僻とも申すべきか。次に殿の役を勤むる鉄

筆将軍、名だけ聞いて泣を止める人世間に多かるべし。然れば其御文章も凄味澤山にて、身体が顫へさうなり、青梅を齧んだ時と同じく、願くは将軍よ、「演繹法や歸納法もて」といふ句」と此處に居はべる」といふ此はべる文字何れか一方の体に定めて戴きたし、折角の御名作、齒を浮かせられては困るゝら。兎に角花やか花やか。

○文明之母附録「八重菊」を讀みて

大阪　琴水女

文明の母第十三號には立派な附録があります、乃ち佐々木光子女史の今様、南翠外史の隨筆様の文章、思案君の美人車、および鉄筆将軍の八重菊です。何れも面白いものばかりですが、殊に私の目をつけたのは八重菊です。

嘗て一年程前、私は鉄筆将軍の明治の細君を讀みて、其の不頓着な書き方と、面白味の少いのに驚きました。が、今度の八重菊を見て、また驚きました、前の驚きはあまり面白くないより出てしもの、後の驚きはあまり面白いより出てしものです。御覧なさい、明治の細君の筆、して此の八重菊の筆、其の文章ハ勿論、其の注意や、趣向や、差別は實にどれ程でせう。そして著者はどちらも鐵筆将軍、斯うもかはるものですか、誠に陶汰の力、おもへば勢の有るには恐れ入ります。

今八重菊を讀みますに、其の文章の優美さ、趣向の面白さ、そして主眼の高潔さ。私は勿論狹いてせうが、これ迄讀んだ小説、偕悲哀を主とした小説で、これ八重菊に勝るものは一つも見ません。抑も此の小説の他に勝ッてる点は何ですか、唯其の主眼、人情の最高尚なる義恩忠孝、これです。嘗て美妙齋が山間の名花を評された様に、此の小説にもまた隱然其の勢力を運ぶなるもの、有るのは、高潔てふ主眼が有るからです。

小説に標準が要るかいらぬか、其れは二の段として、抑も今の小説家に一定の主義のないのには困ッたものです。然るに此の

小説には、立派なる主義があります、ですから面白く讀まれます。而して其の文章の優美なる、(只一二瑕瑾があるとして)まづ無類の上出來でも。雅文の様で時文の様で、新奇の文字を程能く混和し、其の總体の立派さ、紅葉山人の雅俗折衷体と、偕比較してどうでせう。

人間の情として死より悲しいものはないでも、故に悲哀を主とする小説は、此の死を程能く現はし來ツて、讀者に涙を流さするので、斯くするには乃ち眞情といふものを穿たねばなりません。苟くも此の眞情を穿たずば、無理に死を用ゐ、無理に泣かさうとするのは無得策です。嗚呼眞情、この眞情を穿つが肝腎です。今この八重菊の上巻の終、

「母様、母様、母様や、あの葡萄見せなはせ、今朝父様が咽かむくといひぬ、二郎が食ふべどよ持て來つよ、あげてたもれや。」

この一句、この小兒の一辭、此れを讀んで涙を催さんものがありませうか、畢竟是等の文字は、能く眞情を穿ツて徹た餘蘊なきものでせう。

唯私が此の傑作なる八重菊に向ツて、少しく差出口を申したいのは辭でも、まゝ、堅くろしい口調あしき處がありますが、なぜかゝる處を眞の流暢なる雅文にせられなかツたのですか、將軍にも定めし意見もありませう、承りたいものです。が、穿てむ玉も疵も有るでせう、それは實に微瑕、人間がどうして完全圓滿のものを造れませう、皇天、神をさへ今はうらむ世の人はさまざま十人十色とやらです。

本欄には鐵筆將軍の新著百種第六号「殘菊」の批評あれども、あまり記事多につき次號にゆづる(少しくシユンハヅレになるの恐れなきにあらねど)併しおくる、も殘菊といふ意味は因みて、却て面白きかも知れず。



○妻妾の稱呼

鶯波迂人　山下重民稿

つま。

婦人の男子に配せし者の總稱なり。漢土之を妻といふ。

東雅云妻をツマといひしは、ヲトメといふ言葉の轉せしなり。（ツとはヲトといふ言葉を引合せてよぶ語の轉せしなり、マといひメといふまた轉語なり。）

和訓栞云夫妻互に稱してつまといふ。むつましきの義なりといへり。日本紀に孀をよめり。萬葉集には夫をよめり。

重民按するに、つまといふ辭は、夫妻互に稱したることは、古書に徴して明かなれば、ヲトメの語轉せしといはむより、むつましきの義とする方、穩かなるに似たり。其前後にムとシを略せるは、兩音共に約し得らるゝ者なればなり。又漢土に妻といふは、釋名に妻之爲レ言齊也、以二禮問一而得二與レ夫敵體一とあり說文に妻婦與レ己齊者

也とあるに據れは、配耦の義に取れる者ならむ。

わぎも　即ち吾妹なり。

わぎもこ　即ち吾妹子なり。

重民按するに、兩語ともに婦妻の古言にして、夫を我兄とも我兄子ともいふに對して唱ふる所なり。故に夫婦並び稱しては妹兄といふ。夫婦は兄妹ならさるも兄妹に擬して其親愛の情を表せし者と見えたり。方今に至りても年少き夫婦は其妻其夫を呼てニイサム(阿兄)といふ。已に長歌本越後獅子に、兄じやないもの夫じやものと云ふ辭あり。古言の存せる者なり。支那の古代亦然り。岡田挺之が秉穗錄に云、古しへ夫をせといひ妻をいもといふ。兄弟の稱と同じ。もろこしも古しへはかくぞありける。周禮聯兄弟注に、兄弟謂婚姻嫁娶。詩黄鳥注に、此文を引て、疏に是謂夫婦爲兄弟也と見えたり。以て證とすへし。

むかひめ　又もとつめと云

正妻をいふ。新撰字鏡に嫡をよめり。後世は總て本妻といふ。北海道土人は實女と稱するよし、北海道志風俗部に見えたり。

按するに。むかひは向ひふて正配の意。めは妻女なり。もとつめは即ち本妻の義。

〇〇こなみ〇〇
倭名抄に前妻をよめり。日本紀に嫡の字をこなみと注したるに據れば、嫡妻の義なるべし。

〇〇〇〇うはなり
和訓栞云うはなり倭名抄に後妻をよみ、日本紀の歌にもよめり。うはゝ重る義なり。なりは並の義ならびなり。新撰字鏡に嫐をよみ、日本紀に嫉妬をうはなりねたみとよめるもまた是なり。
按るに、うはなりといふこと、古事記白檮原宮の段、大和物語及び檜垣嫗集等にも見えたり。後世は後傍若くは後妻といふ。うはなり撃の圖說は岩瀨惺齋か骨董集に出たり。

〇〇〇〇これうにん
御料人若くは御寮人と書す。中世以下他人の妻を稱す。
貞丈雜記云人の妻を御料人といふ事、料はそのらふとよみて、内所の事どもを取てからふ故なり。御料と云も御料人を略したる詞なり。今時人のむすめの事を御料とも御料人とも云。あやまり也。よめ入せぬはいふまじき也。

注に云光大日、御料と云は、人の妻の事のみにかぎらず、打つけに其名をいはずして尊みていふ詞なり。曾我物語などに、頼朝のことを御料と云ひたること所々に見えたり。

橘庵漫筆云御寮人御寮子など、、若き新婦を貴稱すること、部屋住と云義なり家事と姑に託して、己はあづからず、寮に處る故斯くの如し。御曹司と云も此理なり。曹は局なり。俗部屋住の通稱とす。みなおなじ義なり。

按するに、料と寮と文字の異なるに随ひ、其義もいたくたがへり。何れをよしとさだむべきか、博く諸書を參考するにあらざれば決しがたし。若し新婦に限れる稱とすれば、御寮人と書する方近きに似たり。

附て云、痴談に都俗新婦を迎へし初め、或は客分といふ。漢土の俗語に妻を堂客といふと略ぼ同じと見えたり。これは大抵若き者なれば夫に對しては、此際前にいへるニイサムの稱を用うるなり。

和名抄に、姒婦をおほよめと訓す。即ち大婦にして長子の妻なり。娣婦をおとよめと訓す。即ち弟婦にして次子の妻なり。又あによめを漢土にては、嫂といひ、俗には嫂嫂若くは姐姐といふ。兄弟の妻相呼ては妯音逐娌といふよし。廣雅等に見えたり。

（未完）

正誤

○本誌前々号「母の稱呼」のうち四十四頁第三行かとゑと音通えどとあるは音通どの誤

○ジョングレー姫の傳（承前）

圓山おとね女史譯

ノルソムベルランド公は王の未だ崩じ給はざるに先ち、マリー幷にエサベラの二皇女に使を以て、速に參内して王に拜謁し給ふべきよし、と申し送りしが、實は二皇女の參内を待ちて、之を囚へ奉らんとの企なりしかば、二日の間王の崩御を秘して、密かに、二皇女の參内を待ち給へり。かゝる折しもマリー皇女は此時暫く都に御逗留遊ばされて在りしが、親友より王の崩御の事を密に告げ參らせければ、公けの御訃音なきを驚かせ給ひ、直にサホルクまで御退きありしが、其處に數多の軍兵速に馳せ集りて、專ら守護し奉つれり。其勢都合壹萬二千人にて、龍動指して進發せり。かゝる知らせを聞き、ノルソムベルランド公には敵の半數に滿たざる軍兵を率ゐて、邀へ戰ひしが、其空虚に乘じて都に一揆起りてマリー皇女の御味方に應じ遂に親王ジョンの父サホルク公に逼り「トウェル」の宮を引渡さしめたり。サホルク公は姫の許に到り、皇室の御儀式と女王の御飾とを取り除かしめ給ひ、姫に向ひ意を慥にして、此の大難を忍び給へ。と申しゝかば、姫は從容として御父に對ふるやう、只今の御辭は初め妾を強ひて此位に昇らしめたる仰よりは、實に悅ばしき事に覺え候。前には御父母の仰故に曲げて從ひ參らせしが、今は却りて意易し、とて御位を退き、翌日シイヲンの庵室に籠居し給ひけり。されば此姫の在位の間は、僅に十日に過ぎざ

りたれば、世の善人が不幸を以て諧謔の種となる輩は、之をトゥルブ、クイン」(十二日女王の義）と謂ひ囃せり。かゝりし程に、ノルソムベルランド公は強勇なるマリー方の軍兵に當り難く、勢ひ盡きて其子婦ジョングレーに代ふるに、其敵マリー皇女を以て女王と稱へ奉つるより、詮術なく直に囚はれて獄に下り、大叛逆の罪によりて首を刎られたり。

かくてマリー女王は今女王と成り給ひし御威權を以て、ジョン幷に其一族を囚へて獄に下し給へり、不幸にも哀れなる御姫は、「トウェル」宮に送り反へされたりしが、此頃まで九重の春深く住み給へる宮殿も、今は一身を幽する獄舍と變じ、遂には死出の旅路の悲曲をも演出すべき舞臺となるも程遠からぬを見えにたり。

女王マリーは頑にして悍き御氣質なれども、姬の御位に昇り給ひしは止を得ざる事なりしは。能く知り給ふのみならず、御齡も未だ若く且つ御近親の間なれば、後には御赦免あるべく見えしが、其年の秋一揆の騷動起り、是が爲にマリーの御位も一時危ふく見え給ひしを、姬の御父サホルク公は既に御赦免ありし身を以て、輕々しくも此一揆に加はり給ひしかば、女王の御怒り甚だ強く、十一月三日に姬の御夫婦を大叛逆人として審問をべき命を下し給ひしが、兩人とも死刑と定まり、只其執行の期を定めざりしが、女王は此事より物議を引起さん事を恐れ給ひて、翌年一千五百五十四年の二月八日に、グヲルホルドグドリー幷に其妻ジョングレーを死刑に處すべき委任

狀に署名し給へり、嗚呼此二人の死刑によりて、當時人情の淺間敷かりしを知るべし

其月の十二日の朝「トウェル」宮にて死刑を執り行へり。グヰルホルト、ダドリー公は、愛婿ジョンに最後の面會を請ひしが、ジョンは兩人とも今死に就くべき身にして面會せば、末期に未練を殘さんことを恐れて、之を拒み給ひしが、やゝありて姬は其夫が宮門を出で、斷頭場の方へ赴くを見たりしが、間もなく窓の前を鮮血に塗れたる死骸の蔽ひもなく、車の後に載せて通り過ぐるを瞥見し給へり。

ウェストミンスターの僧正フェケンハムは能辯にして意鋭し。されど其性質温良なる人なりしが、或時姬に向ひ舊教に改宗せんとて說き勸めたりしに、姬は厚く新教を奉じ給ひ、僧正の說には少しも感動し給はず、却りて其にとやかにして待遇よき爲に、思はずも僧正は一日の休息を得給ひし、と申したりき。かく貞靜なれども決して輕薄の傾きあらず、曾てハルヂンクといへる者が改宗したるに付き、一書を贈りし、文辭甚だ恭順にして、其中自ら嚴正の意を含めりといふ。其死刑定りしとき父君に遣せる書に妾が無罪の血は、當に上帝の前に於て其寃を訴ふべしと云へる其辭優にして沈痛悲哀の情言外に顯はれたり。

又姉カザリンに贈りたるギリシヤ文の遺書は、文章の巧なるによりて、歐洲の學者を驚かす程のものには非れども、末期に臨んで意思亂れず、高尚なる感情を少しも傷ふことなきは感ずるに餘りあり。其刑に就くの朝自ら手帳にギリシヤ、ラテイン、イング

リス」の三様の文を記載せしが、其中英語にて記したる文に曰く、「妾が犯せる罪は罰すべきものとせば、妾の弱齢なりしと注意せざりしとは、多少罪を謝するに足るべく上帝并に後世の人は必ず妾が死を憐むことあるべし、」と記るされたり。

姫は「トウェル」の中に御最後を遂げ給へり。是は他の場所にては衆人の目に觸れ、自ら人々の哀憐を引起すときは、朝家の爲に惡しき事とヘンリー第七世の御血統に渡らせ給ふにより、餘人とは扱を異にせらるゝなり。姫は断頭臺に登り、天を仰ぎての給ふやう、妾が女王マリーに對する罪は、妾に於て意の潔白なること、無心なる者が犯せる罪の如し、惟強迫の爲に出でたりと爲すは、自ら承服する所なりと。

實にかくの給ひしこそ道理なり、十七歳の妙齢女子が止を得ず、義父の命に從ひしゆゑに、親族の一女子の爲に死に處せられ、剰へ其國民は自ら誇りて宗教を尊び、法律を重んじ、高尚の氣風ありと稱しながら、かゝる處置を怪まざるのみならず、是に同意したる如きは、暴君の史乘にも未だ其例あるを聞かず。殊に其才藝文學に長じ、婉柔にして至孝なる妙齢女子が、憤を抑へ冤を吞んで刑に就きしが如きは、聞く者をして坐に哀涙を濺がしむ。嗚呼其死は美名を後世に傳へ、却りて史上に永く當世の瑕瑾を殘しけり

（完）

いもかのはなし。

鑑湖漁史

萩谷次氏が妾に結婚を申込みたるなり、妾は風の柳と受けて、まだ年も若く勉學もし

たしなどとかこつけて、程よく辭はりたり。

誠をいへば、妾は恭次氏をばいたく愛慕し居りしなり、しかし妾が此若人と知り合ひとなりたるは、二三月前のことにて、能く其人の性質品行なども知らざれば、其を熟知して後、頼みとなるべき人 りせば、生涯我身を任せんと思ひ、かくはつれなく辭はりしなり。

恭次氏は先き頃大學を卒業したるなり。親もなく兄弟もなき獨身者にて、未だ下宿屋に暮らせり。見たる所にては誠に温和なる若人にて、心がけよろしき親切の人なりしが、未だ社交に慣れざるが爲めにや、至ツて内氣にて小供らしきところありき。財産も亡く父より遺されしもの少なからずと聞き及びたり

されば恭次氏が顔を真赤にし聲を顫はし妾が手を取り、一生懸命に結婚の意を述べたるおり、妾が事にかこつけて、つれなくも辭りたる時、彼人の心中はいかばかり悃かしかりけん、いかばかり苦しかりけん、思いやるだに氣の毒なり。彼人は愛らしき眼元を濕ほして、力なげに妾を見詰め、

『さらば阿露さん、暫く待ちませうが、私は一所不住の旅人で……』

といひつゝ、少し笑を含み、

『ですから私が立ち去れば、二度と私のやうな者は見當りませんよ。』

と言はれたる折り、妾は穴へも入りたき心ちしたり。

これより二三月の間は、自然に双方何となく疎遠の姿にて、妾はあぢきなき日を送りしが、いつとなく恭次氏の冷かになれる心は、妾が誠心に温められて、再び元の如く親しき友となりしこそ嬉しけれ。かくて今日は散策、翌日は音樂會と相伴ふて樂しき日を送るほどに、妾は恭次氏が温和なる性質を知り、親切なる介抱を受くる毎には慕しき戀しさは益々高まり來りて、再び氏が結婚を求むるとあらんには、妾は喜んで我手を與ふべしとぞ思ひつめたる

さるに思ひきや、一日我親愛なる恭次氏が突然行方知れずと聞きたる折の、妾の驚きはいかばかりにてありしぞや。其前の夕、妾は氏と手を携へて公園に逍遥し、いつも幸福に談笑せしものを、其折り明日は打伴れて劇場に行くべしなど、約束したるものを。さるにても何が故に氏は身を隠くしたるにや、後ろめたき程の事を爲す人とも覺えざるに

殆ど同時に萩氏の下宿せる家の少女の行方知れずと聞きたる折りの、妾の驚愕は更にいかばかりにてありしぞや。人は不義の走なりと氏を非難すれども、妾はかたく信ぜり、氏は斯の如く卑しき所行をなせる人ならずと。されども又氏が何故に身を隠くしたるや、少女が亦何故に怪しくも仝時に行方知れずとなりしや、妾は之を推察する能はざりき。

殆んど一月の間妾は悲哀と絶望の雲に閉ぢ籠められて、又以前の如く幸福の日光を

知らず、面白からず暮らしたりしに、一日突然警察署より妾を呼び出だせり。犯せる罪もなし、人の連累の嫌疑を受くる身にもあらざれど、妾は驚き何事ならんと急ぎ警察署に出頭したり。署長は妾に一通の汚れ染みたる書状を示せり、見れば明らかに妾の名宛にて、荻恭次氏より贈りしものなり。妾の心は高く舞り、手顫へ聲さへ變りたり。署長が開封せよと言ふがまゝに開き見れば、文字の所々に汚染ありて分明ならざる所あれども先づ次の如く讀まれたり。

世界に於ける我唯一の友よ。世に戀愛ほど苦しきものはあらじ、予が始めて卿の手を求めざる時、卿がつれなくも振り捨てたる折り、予が絶望苦痛の露だにも卿が知るあらば、卿はかくも無情にてもあらざりしなるべし。予は實に其日我家に歸りて、其喜望絶望の分れし時を憶ひ出で、泣きたり、予は一生婦女子の愛を求めざるべしと思ひたり、此世に生活するの望なしとまで思ひつめたり。されば予は再び煩悩の犬に逐はれざらんが爲め、その日より數日間は唯家に閉ぢて、古人を友として暮らしたるが、浮世の義理に逼られて、心ならずも社交に出づれば、彼處の舞踏會、此處の園遊、其たび毎に予が眼を奪ひ去るは唯卿のみ。卿に面を合すことの恥かしければ、予は心の駒に鞭あてゝ、卿を避けんとあせるも、憎むべし卿の嫣然たる笑、卿が楚々たる風姿、殊に卿が優さしき心は、磁石の鐵を引く如く、予は知らず〳〵卿の元へ引きよせられたり。何とてかく人の心は弱きものにや。かくて袖を連らねて歩み、對座し

て語る毎に、予が卿を戀ふるの情は、熱焔更に一束の薪を加へ、消えんと欲するも能はず、止めんとあせるも功なし。憐れみ給へ、予が切情を。予は其後幾たびか再び卿が手を求むることを敢てせんとし、言は殆んど予が唇迄も上りたれども又もやつきなき卿の辭退に會はんことを恐れて止みぬ。今日予は卿と樂しく公園に遊び、家に歸りつくづくと卿を憶ひ出で、切情禁ぜんと欲して禁ずる能はず、再び卿に會ふて予が意を曰はんと思へども、若し不幸にして再び卿の辭退を受くることあらば、予は何の面目あるべき、予は此故を以て卿に向て直に手を請ふを敢てせず。予は切に乞ふ、卿が情の露を以て予が熱情を冷されよ。卿にして若し予が最愛の人たる事を許諾せらるゝならば、乞ふ此書に答へよ、否らざれば一も言ふこと勿らしめよ、予は其を見るを嫌ふ。予は一所不住の旅人なり、卿にして予が希望を充たすことなくんば、予は再び卿と面を合はすを耻ぢ、速に此地を去らんと欲す。予は既に旅装を整へ、卿が善き返事を待てり。心舞り、手顫へ、文に條理なし、字錯亂せり、乞ふ推讀せよ。

十一月十日夜

荻　恭　次。

阿露さま

妾は轟く胸を靜めて、如何にして此書狀が署長の手に入りしやを聞きしに、署長は下の如く答へたり。昨日人夫が御堀の水を浚らへ居しに、甚しき臭氣の散ずるを怪しみ泥中を穿鑿せしに、十五六歳ばかりの少女の死屍、深く泥中に埋もれ居たり何處の誰と

も知らざれバ、撿視の際何か手がかりともなるものハなきやと、衣服等を探ぐりしに、其懐中に於て此書狀を發見したりしかバ、さてこそかくハ卿を呼び出したるなりと。妾ハ荻恭次氏が下宿せし家の少女なりと推知せしかバ、其旨を答へて歸りしが。これにて恭次氏が身を隠したる理由ハ知るを得たり。少女ハ恭次氏の手紙を夜中妾が家に持ち來る途中、御堀に沈みて憐れにも死したるなり、其誤ツて溺れしか、但しハ又人の爲めに殺されしかハ知らざれど。恭次氏ハ又妾よりの返事なきが爲め、二度までも嫌はれしかと邪推して、日頃内氣の性分なれバ妾に合す面なしとや思ひけん、大早計にも身を隠したるなり。實ふ人の縁ハ天の定むるものなるか、兩人相戀ふて何時までも生涯の道連れとなるべかりし我々が、意外の事變にてゆくりなくも其意を果し能はざりしとハ。

其後妾ハ良縁を求めて或家に嫁ぎ、こゝに四五年を經過したるが、一日某伯の邸にて近頃になき大舞踏會の催しあり、是ハ先日歸朝したる俊秀の聞えある某法學博士の爲めに催したるものなりとのことなりしが、妾も招待を受けたれバ、夫に伴ひて出席し、朋友の貴婦人達と四方山の話しをなしつゝありしに、邸外馬車の聲轔々と響き渡りて入り來りたるハ、今夜の正客とも言ふべき法學博士某氏なり。妻君にやあらん、盛裝しさる若く美くしき外國婦人の手を携さへしづ／＼舞踏室に入り來りたる立派なる紳士を見れバ、意外、是れ妾が前の情人荻恭次氏なりき。

後にて聞きさる話によれば、恭次氏は或外國人に伴はれて佛國へ行き、永く法學を修めて俊秀の聞え高く、遂に博士の名譽と美くしき妻とを得て、錦を飾りて歸朝せるなり

（完）

○學者の細君

佛國小說家の泰斗、バルザック氏の名言中に、天下の大人と稱せらるゝ人は、妻を持たず又子を持たざるべし、彼は天下に屬して妻に屬せず、又家族に屬せず、唯時と場合に從ひて、或は名譽の道を歩し、或は犧牲の途を踏むものなり、とありしが、今之れを實地に試むるに、學者の上に就きては、聊か之に異議なきを得ず。若し天下に妻の戀愛と同情を要するものならば、學者こそ眞に其の人ならんと思へる、筈なるに、文學家の傳記を讀むに、學者なるものは殊に家族團欒の樂を欠くもの多しとの事なり。扨此の不幸は果が一般に其の原因を爲したるものにして、先希臘の哲學者ソクラテスが家族團欒の樂を欠きて、サンチップ婦人の家に寄寓せしことは、我れ人皆知る所なり。又羅馬の豪傑シセロは家に於ける生活の幸福を享けしものにあらず。ミルトンは失樂園の詩を作れり、然れども三たび妻を娶りても、自家生活の中に極樂園を見出だす能はざりし。シエークスピーヤは自己の轗軻辛酸の經驗より、遂に年少にして娶る人は、生涯の幸福を害せらるゝ人なりと明言し、何れの時にも此は事實なりといへり。アヂソンハ

ウオーアウイツク伯爵未亡夫人と盛大なる結婚を遂げしも、ホルラント家の零落より止むを得ぞ、ウイルの咖啡店に遁逃する不幸を見たり。デクインシー曾て文學家の妻子に關していへるあり、文學家の妻たるものは、何事も誠實にして家事萬端を擧げて、之を己の一身に負ひ、良人をして毫も心置きなからしむる婦人なるの、将良人文學的生活に必要なる婦人ならざるべからぞと。文學家の夫人に文學ある婦人は甚だ稀に見る所なるが、されど最著明なる例は、アルフホンスドーテの夫人なり。彼は文學上良人に非常の助力を與へたり、良人の脱稿したる原稿を取りて、丁寧に校正し、且之を清書する際にも、良人の氣附かざる些少の誤謬を訂正せり。斯くてドーデは再其の清書したる原稿を取りて、最終の修正を加へ、句を擇み字を錬り終りて、夫人に渡せば、夫人は再び之を清書して、印刷に廻すを常としたり。バルウエルは身氣方に盛なる時に當り婀娜なる一少女と不圖互に戀慕する間柄となりぬ、彼は遂に結婚を爲したり、然るに彼は年少戀愛の夢は有害のものなることを速に發見するに至りたり、幾許ならぞして彼れ婀娜たる新婦は、家内風波の源となり、直に夫妻別居するに至りたり。ヂツケンスの家内生活の幸福少かりしとは、滿足なる解釋を得ぞと雖、彼は自ら明言していへり、夫婦全く性質を異にせるに依れりと。思ふに是れ彼が一身の空想に耽けたるに依る。彼著述の成功は益々彼の地位を嵩めて、ブレツシントン婦人ウオルターサベー、シランドル、テンニーソン、バルヴエル等の大家と交り、家に於いてよりも、寧ろ外に於いて幸福を

求むるに至りたり。彼は自己の才學を以て、最高等社會に出入せるを得るに至りたれども彼の、夫人は初め貧賤を共にせし時と同じ身分にして、彼は縉紳貴族に尊重せらる、交際社會の獅子となりしも、夫人の務は九人の兒の母として家を守るにあれば、心智を磨き禮法を修めて、良人と共に貴族社會に入る能はざりしバイロンは不幸なる時に於いて、不幸なる婦人に結婚したり、夫人の冷淡なる心得は、バイロンの愛に對して冷淡なり、夫人の數學的の心は、バイロンの寛洪熱心なる氣質と相合はず、不快なる生活を送ること一年にして、夫人は一言を告げずして家を出で去れり、唯再歸り來らざるのみならず、手紙を送りても返事なく、和解せんと欲するも應ぜざりし、斯くて妻に見棄てられし此の悲と苦は、彼をして遂に夭死せしめたり。然れども又之に反して文學者の妻に良人を慰め助けて、一家團欒の幸福を享けしめしもの亦少からず、されど妻の愛らしき心情より發する戀愛は、菫の香の如く、人知れず其の間に存するものなるを以て多く世に知られざるなり。（朝野新聞十一月三日）

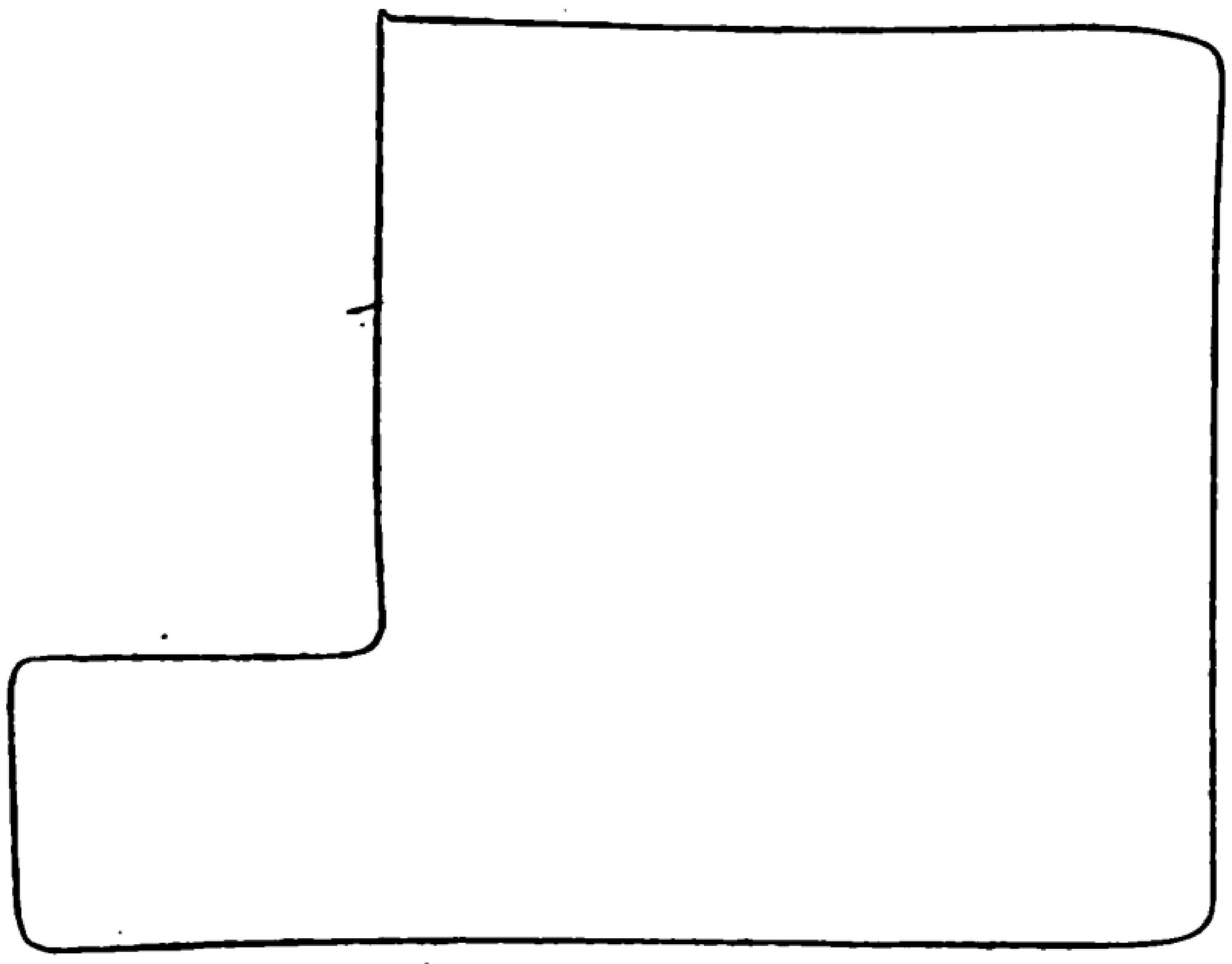
○餘興

雲通路太夫

○男子は鷄卵のごとし。　或る女房、其望を遂せむために、常に其の夫に泣きつきて口說く事となせり。女房の母あるときいふ樣、お前なんだよ……男といふものは丁度鷄卵の樣なものだよ、少しの間熱き湯に入れりや柔かに煮えるし、あまり長く其の中に入れておくと、堅くなります、其の鹽梅がありますからね………

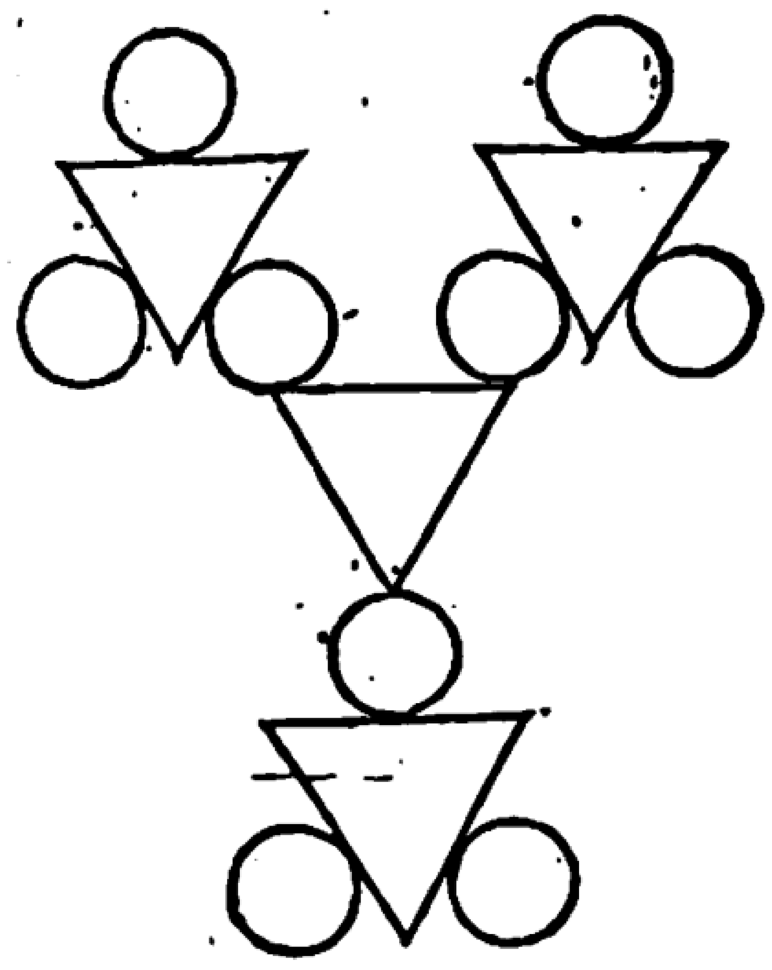
○決してこわれません。「サア旦那一つお買ひなさいまし、此の土瓶ハ…………ヘイ此の急須ハ…………安くあげますよ。「まアいらないよ、買ッたのが澤山あるから。」それでもお買ひなさいまし。」「なぜ?」「なぜッて旦那、私の處の陶器は別ですせ「どんなに別なのだ。」「ヘイ決してこわれないのが妙です。」「ナニこわれない?。」「ヘイ私の處の陶器に限ッて、こわーさへしなければ決してこわれません。

○考物



四角なるものを大小二個ならべたる形

右のものを二鋏で四角にするには、如何したら宜しうござい升。(磐城大八木氏出題)



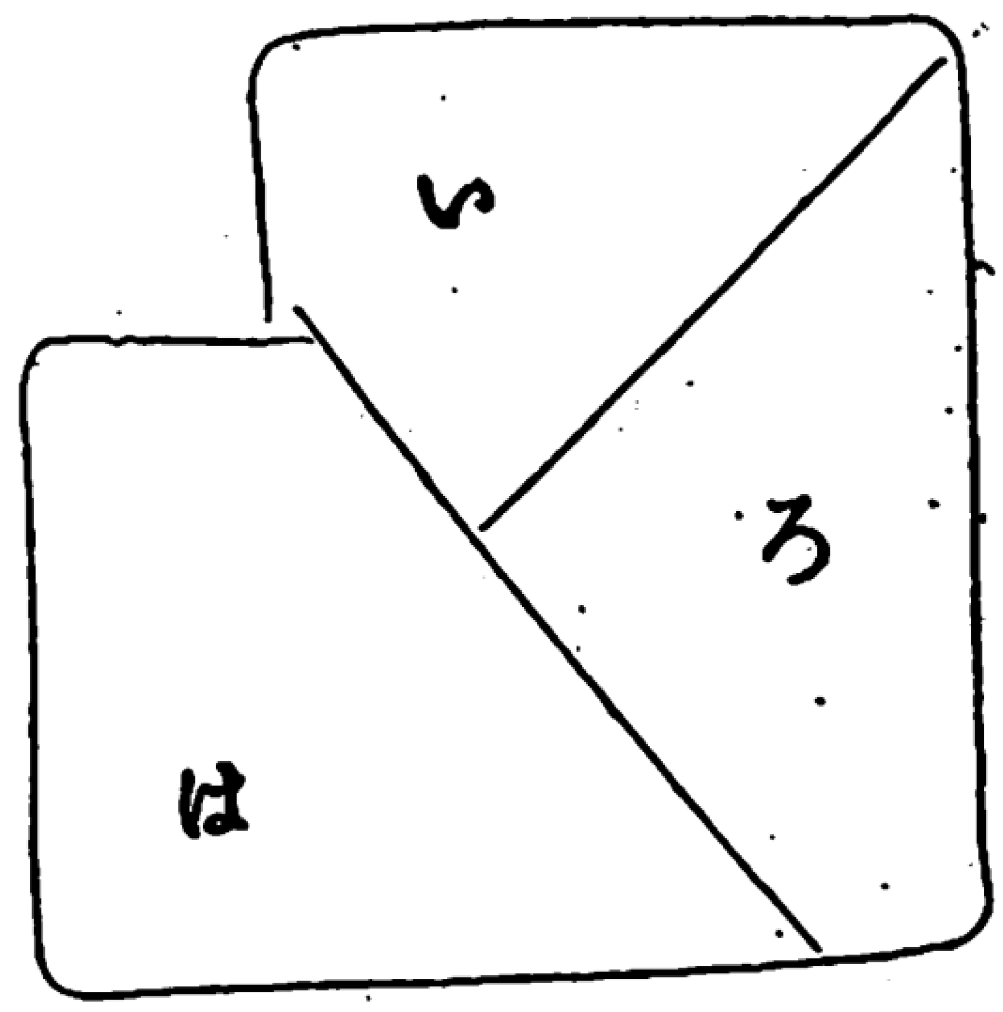
四個の三角に九個の正圓ある形

右のやうに四個の三角がある、其の周邊に正圓が總べて九個ある、そこで一より九までの數字を其れ正圓の中へ入れ、どの三角を見ても、周邊の三個の正圓の中の數字が、十五の數に見える樣にするには、どう數字を入れゝば宜しうござい升。(大阪琴水女出題)

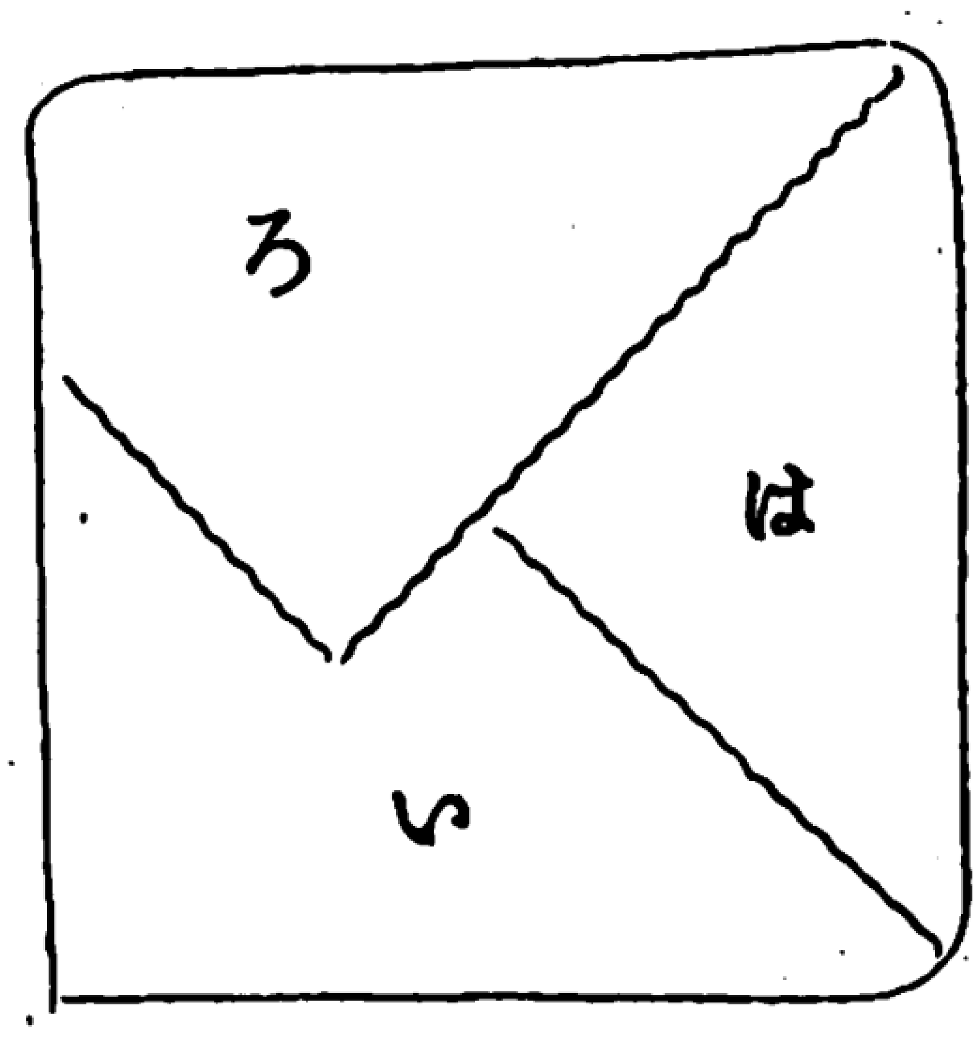
此の二題の考物をお當てになツた御方には、文明之母どの號でも一部差上ます、序に申上ます。考物をお當てになツた御方には、是迄本誌を一部差上るのが成規て、必らず差上げた事と存じますが、多くの中には萬が一お當てになツた御方に差上げないで、却てお當てにならぬ御方に差上げた事もあるか知れません。若しお當てになツた御方で、雜誌が屆かんことがありましたなら、何卒御遠慮なしにさう御申越を願ひます、早速差上げませうから。それに是れから新考物の題を送られ、或は其の解答を寄せらるゝ折には、

其の状袋に「考物在中」と御記載を願ひます。

○前々号の考物　の解答者は、九十四人でございました、其の中お當てになツた御方は四十八人です、兎に角次の通りにきればよろしいのです。



切り離して合せると次の通りになります





天厨の美味貧兒の口に入る

本月十八日、禁中に於いて開かる、筈なりし觀菊の御宴も、折あしく雨天にて御延引仰せ出だされし爲め、膳部は種々の珍膳佳肴を餘せし趣きを、畏きあたりの御聽きに達し、福田會育兒院へ下賜あるべき旨、五辻大膳大夫を以て同會長へ達せしといふ。嗚呼！天厨の美味貧兒の口に入る、該院一同聖恩の優渥なるに感涙を催したる宜なる哉。記し了つて亦感涙萬行！

○日本織物の流行

我國の美術一たび歐米の文明社會に聲名を轟かしたるより、各地の新聞雜誌は頻に日本人は機敏にして、手藝の巧なると、意匠の高尚なるとを稱道し、近年彼地は貴顯富豪等は、競て我が美術品を購ふの風を生じ、或は一品巨萬を抛ちて得色あるは次第にて、今や忽ち全般の流行を來せり。現に彼地の意匠家は、日本の器具織物の摸様、何となく雅致多くして、且つ高尚なるに感じ、頻に之を摸造して習來を博せるも毎度のことにて、近頃流行の中心と呼ばれたる巴里に於ても、婦人の衣服などに新流行を來すに方り、孰れも日本の摸様を摸擬したる者に非るなし、從て評判も高くして其賣行は從前の比にあらず、殊に絹織物に至ては、販賣極めて速かにして、羽二重地ハンカチーフの如き、既に歐米各國到處に擴まりたるを見受けたり。又昨年來は巴里の婦人社會にて日本縮緬及羽二重地の衣服に、薄染若くは形摸様を着々たる者流行の萌ありしが、さるはなき有様なり。左れば日本製造品と云へば、自然一般人の注意を惹き、本年同地の博覽會にて參觀の婦人を見るに、槪ね右の衣服を着々たるは、既に全般の流行を來しさる證なるべし。昨年中我が日本より輸出したる右の品々は、百五十萬圓の多きに達したるが、尚ほ又本年は一層多額の輸出を爲したる由なり。既に世界流行の中心たる巴里に於て右の有樣なる以上は、來年は英、米其他諸國に於ても其の流行を移すべき順序なるゆゑ、我が絹織物は引續き非常の好景氣を以て輸出するならん。斯くも次第々々に一般人の着目する所と爲り、其の好評を得るに於ては、將來充分の望を屬すべく、隨つて實業家は之に對する準備に

かるべからず。貿易商は常に諸外國に於ける流行の趣を探知して、之を製造者に傳へ、製造者は務めて織物の原緜をゑらびて彼地の信用を厚うし、又常に嗜好に適せるを務むること肝要なるべしと、此頃歸朝したる農商務技師山岡次郎氏は物語りと云ふ

右貴女之友第六十四号に記載したる所なるが日本人たるもの一讀して可なり否一讀せざるべからず

○賀すべし

島根縣師範學校女子部に於いては、此の度生徒結髮の風を一定しさるが、必ず束髮なるべしと[illegible]ひの外、日本固有のイチヨウ髷なりといふ。賀すべし、賀すべし。

○体操

同じく島根縣松江の各小學校にては、品格上弊害あるを認めたる由にて、當時女子の体操を中止し居るやに聞きしが、如何なる故にや吾人も女子の体操に就きては、聊か意見なきにもあらざれども、茲に論ぜるの暇なし。兎に角教育者の一考を要すべきことなり。而して極端に立るの不可なることは決して忘るべからず。

○臨時美術展覽會

日本美術協會列品館に於いて、十一月三日より十日間開設せし臨時美術展覽會は、東京及び大坂よりの出品に係り、古畫殆んと其の三分の二を占め、餘は漆器其の他にて充ち滿てり。西洋心酔の眼を以て見れば、之れ等も矢張馬鹿らしく見ゆべきか、矢張彼の……彫像の方遙かに勝る樣見ゆべきか。

○女子法律專門學校の創始

と題して、教育週報記者の記せる所を見るに曰く「歐洲を擧げて三名と數へらる、法律學卒業婦人の一人なる瑞西ジユリウ大學校の法律博士ミレーケムビン夫人は、其の後米國紐育大學に於て同國の法律を講究し、爾来獨立の業務に從事し傍ら公共の事業に當り居たりしが、日頃屢々財産ある婦女子より、法律上の質問を受けしこともあり、又夫人か良人なるプレスピリヤン派の宣教師なる人も、夫人に勸むるに此等の女子の爲に法律を講ずべきを以てせるにより、從来嘗て其の類例なき女子法律專門學校設立の意を決して、去月七日紐育府に於て開校したるに、就學の女生十一名を得たりといふ。十一名の人數は案外の少數なれども、才學を以て女子跋扈せる米國なればこそ、責めても是だ〻の長舌者を出せる

なるべし」と。或人曰く週報記者は斯く信ぜらるれども、其は實に妄信たるに過ぎず、若し同夫人の日本に於いて開校したらんには果して如何、余はかならず百名以上の生徒は忽ちにして得らるべきを知るなりと。吾人は其の何れか當れるやを知らず、暫く斯く記して讀者の判別を待つ。

結婚に關する取

男女結婚の早期は、先頃内務省衛生局にて取調べの上、その筋へ具申せられしが、尚又早年結婚より生ずる病根等及び、老年者結婚の極度等をも目下取調べ中なりといふ。

案外の處に巡査の必要

此の度新設になりたる歌舞伎座にては、俳優の出入口非常に雜遝して頻返しがつかぬより、詮方なく京橋警察署へ願ひ出て、右取締りの爲め午後一時より十一時まで、巡査三名借用せりといふ。案外の處に巡査の必要あるものかな、と驚くは野暮の骨頂、藝よりは役者のお顔拝見に行く此の世の中、實に案外、實に案外。

寄書

○おぼつかなきもの　　甘醉道人

似るべうもあらねど、清女がものせし枕の草紙に似せて、

三日ばかりがほどとけずもとおもふ春の雪。

花見にあすをちぎりしよさり、雨ふり風さへいでたる。

丈ひでたる松のさえだにかゝれる藤の花。

五月雨に、はれなばゆかんなどちぎりたる。

夏のあしたきのふのひを思ひおこしたる。

ひとよりなづり氷おこせたるに、ながゐするまろうどある。

風にゆらぐ萩の葉の露。

かさなくていでたるに、時雨めきたる。

霧こめたる山道。

霜しろくおきたる板橋。
こん人にみせん、と庭の落葉はかせざるに、さら〱とちりしきりたる
雪つもりて、ゆみのごとたゞみたる竹。

○冬季雜題五句　甘醉道人

爽講　客席ハ圓十郎や爽講
小春　油断して夜道をもどる小春かな
歸花　片枝ハ草紙もちして歸り花
紙子　紙子にも好みのあるや人心
水鳥　水鳥や通ふ舟には邪魔もせじ

ある時福島の町にありける折親しき友の故郷に歸るを送るとてよめる　片崎愛鶴
別るともいつかは廻り逢阪の深きちぎりをきみわすれるや

菊多郡花舘の山をこゆるとて　仝
春くれど四方のながめものどかにて越るもうれし花舘の山
曉天春雨　仝
春雨や板方をたゝく音たえて枕にひゞくとほでらの鐘
生文社の社運を祝きて　仝
常盤なる松のみどりの色もかえじ文のはやしに殘るこの雜誌
文明の母はさかんになれるを祝きて　高崎櫻溪
あきらかに治る御代ともろともに千代萬代とさかえ行らん

懸賞募集の文章ハ、既に撰擇を終り、得賞者も極りたれども、本號ハ記事多きに就き、次號に於て之を表白すべき筈なり、讀者はしばらく之を待て。

正五位男爵　松木美彦君　題字
米人チー、ゼイムス先生閲序文
易堂先生著
豊原守外先生序文

増補第三版 見聞不遺 記臆真理獨修書

全一冊三千部限リ減
實價五拾錢郵税四錢
●郵券代用二錢券以
下一割増ニ諾ス

本書初版ハ記事高尚ノ部分多クシテ淺學諸氏ニハ不解ノ廉モ有タルカ第二版ハ之ニ少々増補シタルモ未タ全ク滿足ヲ能フルヲ得ズ故ニ第三版ハ何ニ人ニモ解シ易ク尚倍々増補シタレバ此ニテ**完全無欠**ル諸君ヲシテ滿足セシムノ良書トナリタリ

(目録大意) 第一章 **概論** 第二章 **記臆法真理** 第三章 **器械的記臆記法** 第四章 **記臆法參考** 第五章 **形意的記臆法** 第六章 **比喩的記臆法** 第七章 **假借的記臆法** 第八章 **自然的記臆法** 等ナリ

●●各新聞雑誌ニ三ノ批評ヲ略記スレバ左ノ如シ●●●●

(東雲新聞) 記臆眞理獨修書 (中略) 器械的、形体的、形意的、比喩的、仮借的、自然的、等ノ記臆法ヲ網羅シタル良書ナリ

(新世界) 記臆眞理獨修書 (中略) 易堂主人ノ其著述ニ係ル標題ノ如キ書ヲ見ルニ類ニ據リ數ヲ推シテ記臆法ヲ講述セラレタルモノニシテ世ノ學生ハ必ズ一讀スベキノ良書ナリ

(関西日報) 記臆眞理獨修書 (中略) 記臆ノ助トナルヘキ事ヲ述タル委シキ書ナリ

(毎日新聞) 記臆眞理獨修書 (中略) 物ノおぼえノ妙法故ニ購求者多ク初刊ハ賣盡シ再版ヲ發行シタリ依テ記者批評ノ限リニ非ス良書タルヿ推シテ知ルヘシ

●本書ハ○○○○○○術ノ如キ僅少備生法ノ一分ノミヲ書タル雑書ト同視スル勿レ

專賣所

大坂東區京橋通御抜筋 **備後屋書店**

東京銀座二丁目十四番地 **日新館**

賣捌

南傳馬町目黒支店、本町中外堂、南神保町若菜書店、通油町桊岡屋、湯島切通坂町南江堂、元富士町盛春堂、京都寺町松原南内山改進堂、河原町三條北入大黒屋、

●増補訂正 再版發行

本書初版三千部ハ發行當日より非常の大好評を博し一旬ならずして忽ち賣盡をに至れり依て今回大に増補訂正し奇法項目數件を追加し更に紙數を増をこと數ページ實に完全無欠の良書となれり依て本日より再版五千部を發賣す志望の方ハ乞ふ速に注文あらんことを

●學士會院原坦山大先生題字 ●版權所有

●南蕉庵主平澤了元先生著述

見聞不遺 終身不忘

記臆増進奇法

ものをぼゑわすれぬきほう

全一冊洋綴 美本正價郵税共廿七錢 郵券代用二割増

本書ハ著者が數年前より哲理、心理、禪理の學理的應用と勞力的の作用とを折衷酌量して種々實驗研究し本年十月に至り始めて**奏効確實にして且完全なる良結果**を得たるを以て曾ハ十數名の知人朋友に示し實施せしめたるに何れも同一の効果を得て最早寸毫錣ひなきを以て一ハ弘く此新奇法を世人に傳へ同胞を益せんが爲め一ハ當時二三の好商輩が偏奇無効の記臆法書を出版し誇大飾言の廣告をなす爲め世人が之に迷ひ多額の金圓を浪費するを救はんが爲め内務省に請ひ**版權免許**を得て且つ普及を計る主意に基き殊更に極めて**價を低廉**にし爰に發賣するに至るものなり已に説きし如く本書に示す奇法ハ世界未發の新法にて此法を施せむ生涯疾病に罹ることを免れ精神快爽智力活潑となり**記臆力大に増進**し人世百般のこと見聞更に忘るゝこと無きに至るハ著者が確證せられたる所なり世人請ふ速に本書を繙き其眞味を験せよ●定價●郵便小爲替は東京神田郵便局取組の事●着金の即刻送本す

専權一手發賣所 共益商舍 神田末廣町十番地

○京華春報

毎月三回五之日發兌

剪翠剪紅ノ彩筆ヲ以テ都門ノ繁華ヲ寫シ流麗洒落ノ妙文ヲ以テ世俗ノ狀態ヲ記シ政事ノ得失社交ノ利弊ヲ評論スルニ至テハ或ハ譬喩或ハ寓言或ハ諧謔或ハ滑稽ヲ以テシ諫諷箴規ヲ隱約微妙ノ間ニ存セシム是レ我京華春報ノ一大新面目也若夫艶麗ノ筆華絢爛ノ文彩ハ記者夙ニ一家獨得ノ長技ヲ有シ敢テ他ノ鞏ニ傚ハス因テ本社ハ服部撫松居士ヲ推シテ主筆ト爲シ務メテ妙篇ヲ撰ヒ奇文ヲ採リ更ニ新機軸ヲ出スアラントス大方君子幸ニ愛讀セヨ

○第四號十一月十五日發兌○目次○時事門●國子坂觀菊有感●新法律ヲ讀んで色深い政事家に告ぐ○雜説門●鍍金淑女説●美人慈善會●戲捕遊廓馬以記●春報の發行を祝ふ●噴飯新話○花街門●洲崎新廓大松葉樓○柳巷門●情志活談●群猫爭餌(押書)○詩歌門●回房●代披酬人○小説門●政界壯士濫褸の錦●迷之懺悔六人女●春色發宿梅(押書)

春報定價		廣告料	
一冊	金七錢	五號活字廿二字詰一行ニ付	
十冊	前金六拾五錢	十行以下	金拾錢
十八冊	前金壹圓十錢	十一行以上	金八錢
三十六冊	前金貳圓	二十行以上	金六錢

○府外ハ壹冊ニ付金五厘ヲ要ス○郵便爲替ハ東京芝區芝口郵便支局ヘ御振込被下度候○代價郵券ニテ御送付ノ分ハ一割増之事○見本ハ郵券七錢五厘ニテ呈スヘシ

發行所 東京市京橋區南槇町一番地 京春社

○再版出來せり

此書發刊後未だ半年ならずして初板五千部を賣盡せり以て世評の如何を知るに足らん今爰に再版成る依て江湖の諸君に報ず

須藤南翠外史著

再版

小説唐松操　全

總クロース金字入最上美本賣價金廿八錢遞送稅金四錢

苟くも目に小説を見るものは我が文壇の老將に須藤南翠其人あるを記せざるはあらざるべし南翠先生の文章は流麗婉曲にして讀む者倦むを覺えず南翠先生の想像は富贍強大にして千百盡くるを知らず其の婉麗なる筆を以て其の豐贍なる奇想を描きたるものは我が「唐松操」とす此書唐松操なる一浪士が妖怪を退治て大いに英名を京攝の間に轟かし進んで天下の大法官となり大義高潔の名を得るに終ると雖とも其間幾多の轗軻不遇を寫して剩さず理想と見れば理想、歴史と見れば歴史、寓意と見れば寓意、其の結構したる所の境遇は讀者の境遇に依りて如何にとも觀察を下さるべし是れ「唐松操」が出色の妙地なりと爲す論より證據先づ一本を購ふて繙き給はゞ書肆の多辯を俟たずして快と呼び奇と叫び妙と稱へらるゝと疑ひなし

發賣所　東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿貳番地　長嶋恭三郎

○新版の豫告○

思案外史著 京鹿子

作者の味噌に曰く、近頃の樣に小說流行の世の中でも恐らくこれ程の名作はなからん? 鷄群の一鶴と迄ハ行かずとも、責めて掃溜のヒヨ子だと云はれさいが山々にて大膽にもそろ〳〵出版爲致候。

本屋の口上に曰く、當時艷筆家の名ある思案外史の新作なれバ、万更の拙作でも無之と存じ來月早々出版可仕候間、京鹿子の染あがり篤と御批判の程奉願上候。

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地

發兌書肆　文昌堂

(遞信省認可)